

テニスの起源と発達について

鈴木 正

—目 次—

はじめに	テニスの伝来
テニスの元祖	軽井沢テニスのはじまりと経過
テニス用語の起源	日本におけるテニス対抗戦の始 まり
Tennis の語源	東京高等師範学校のテニス
ラヴ (Love…零点) の起源	東京高等商業 (一橋大学) のテ ニス
Fifteen, Thirty, Forty を使 用した理由	早稲田のテニスと安部磯雄
フランスでの jeu de paume	日本の硬式テニス
イギリスでのテニス	軟球と硬球, および軟球内部の 混乱
ウィンブルドン全英選手権大会	準硬式テニス
デビス・カップ・マッチ (Davis Cup Match)	オリンピック大会とテニス
その他の世界的選手権大会	テニス解説年表
アメリカでのテニス	
日本のテニス	

はじめに

テニスの歴史は非常に古く、その起源的球戯 (球技ではなくて) については明瞭にわかっていない。メンケ (Frank G. Menke) はこのことについて、「コート・テニスの起源は大昔の霧の中に含まれている」——“The origin of court tennis is shrouded in the mists of antiquity” という文学的な修辞を用いて表現している¹⁾。Menke のこの表現の場合、be shrouded in mist にはもちろん「霧に包まれる」とか、「霧の中におおい隠されている」という意味があるのだが、ある語学者の話では、shroud という単語を用いたのは、単に包まれ

ているという意味でなく意図的な使用だという。それは「shroud」には「経帷子…きょうかたびら」とか、「死体にきょうかたびらを着せる」という意味があって、紀元前に行なわれていた大昔の「テニスの元祖的遊戯」はすでに死体のようなもので、記録も残されていない何千年もの長い時間という霧の中に包まれて埋没されている、経帷子に包まれたテニスの過去の実体はとうてい明らかにはなし難いということを表現するために用いたのだらうということであった。

すなわち、テニスの元祖は、B. C. 500 年頃のエジプト、またはペルシアに発しているといわれたり²⁾、ギリシアやローマでは現在のテニスとつながりがあると見られる La paume に似たゲームで、ハンドボール (Game of handball) という球戯が行なわれていたという説がある³⁾。たとえば、Modern Physical Education の第 22 章 Tennis の項には、“Tennis was derived from the game of handball which originated in Greece. Handball was played in many countries, but was not popular because of the hardness of the ball.” と述べてある⁴⁾。

このように、その起源が大変古く、その後の経過が単純でなかったことは、テニスという名称が誕生するまでに、いろいろの名前で呼ばれていたこと、すなわち、ファイブズ (Fives)、ハンドボール (Handball)、ラケット (Raquets or Rackets)、スクワッシュ・ラケット (Squash Rackets) ジュ・デ・ポーム (jeu de Paume)、スフェリスティック (Sphairistike)、など、さらにテニスという名が誕生してからも、コート・テニス (Court Tennis)、ロイヤル・テニス (Royal Tennis)、ローン・テニス (Lawn Tennis)、ロング・テニス (Longue Tennis)、フィールド・テニス (Field Tennis)、パドル・テニス (Paddle Tennis)、プラットホーム・テニス (Platform Tennis)、クオイト・テニス (Quoit Tennis)、デッキ・テニス (Deck Tennis)、リアル・テニス (Real Tennis)、フリー・テニス (Free Tennis) 等々の主流、分派各種形態のゲームに発展し普及したことから容易に推察されるのである。さらに進んで、テーブル・テニス、

パレー・ボール、バドミントンなども、現在では独立した立派な球技の一種目となっているが、ゲームの形式からみれば、テニスの暗示を受けて誕生したものである。

また、テニスは日本に伝わっては、経済的および用具の輸入が不便だったなどの理由から、日本独特の、軟式テニスと考え出され、一時は（大正末期）準硬式庭球という種目も行なわれたことがあった（準硬式については後で詳述する）。

このように複雑なテニスの歴史を評して、熊谷一弥氏は「丁度名も知れない捨児のようなもので、幼時に打擲されながらも、持って生れた徳と善性とのために、やがては幸福を克ち得て世界に名を挙げるに至るのと、ややその趣を同じうしているかに見える。その血統はどうであるか、その先祖は誰であるか、又如何にして青年時代の苦闘を切り抜けてきたか、と言うのは誰にもわからない疑問とされているが、この競技が以前においても、現今と異なる形式で僅かながらも存在していたということは、想像するに難くはない⁵⁾。」と述べている。

このことから見ても、テニスの歴史をたどることはきわめて困難な仕事であるが、できる限りその発生から発達の経過について明らかにするのが本稿の目的である。

テニスの元祖

平手でボールを壁に打ち当て、はね返ってくる球をまた平手で打ち返して遊ぶ遊戯が、古くから自然の間に行なわれたことは容易に想像されよう。これが発展して、一つの球を二人で交互に壁に打ちつけ、その返球を相手に打たせ、相手に失敗を強いて、得点を重ね勝敗をきめるといった形になった。このゲームは手でボールを打ったことから、ハンド・ボールと呼ばれたり（後にドイツで考案されたフィールドハンドボール—送球—とは全く別のもの）、5本の指の掌を使うことからファイブズ（Fives）と名づけられたりした。（後年テニスという言葉ができてからは、壁テニスとも呼ばれるようになった）このファイブズは、ローマの浴場の産物であるという説もある⁶⁾から B.C. 500 年頃と思

われる。

このハンド・ボールは別にアイルランドでも始められ、イングランド、スコットランド、ウェールズなどでも行なわれ、フランスに渡り、ラ・ポーム(La Paume) となって発展した。Paume はフランス語の「掌」の意であり、Hand よりは実際球を打つ手の平(パーム Palm) に重きを置いた名称である。日本ではあまり見られない球技であるが、現在でも欧米諸国、特にラテン諸国では盛んに行なわれている。

本来のハンドボールが壁の代わりに中央に土を高くしたり、柵をおいて、二人が向い合い互にボールを打ち合うように進展したのが La Paume→Jeu de Paume である。

その頃用いられていたボールは、羊毛や髪の毛などを、布や革の袋につめたもので、現在のゴム球に空気を入れたものよりは重く、コチコチで裸の掌でたたくという原始的な方法では痛みを感じたのであろう。やがて手袋を用い、さらに一層球のはね返りをよくするために指の間に細ひもを張り、このひもが現在のラケットのガットに進歩したといわれている。ラケット(Racket)の語源だといわれるアラビア語の“rahat”⁷⁾およびラテン語の“raha”⁸⁾はいずれも「掌」のことである。すなわち現在のラケットは腕と掌の延長であり、はじめは木製のバットが工夫され、それに続いて短い柄のついた櫂(舟の櫂)形のもの、平たい板に片手で握りやすい柄をつけたり、平板を削って握りやすく扇型にしたものなどが作られ、柄のついた杵に羊皮を張ったり、羊腸を絃(弦)として張ったラケットが完成された。このような経過を経て完成されたラケットができ上がったのは15世紀末か16世紀に入ってからであった⁹⁾。ラケットのガット(gut)は、もともとは、消化管とか腸の意味で、ラケットには羊腸が最高の弾力があるとして愛用された。この他に羊の腸は紐のようにして外科手術で縫い合せ用に使ったり、釣糸の“てぐす”やバイオリンの弦などにも用いる。最近ではナイロン・ストリングが非常によくなり、テニス界にも大きな貢献をしているが、しかし弾じきにはやはり Sheep gut の微妙さが最高だといわれている。科学の発達した現在でも、このガットだけは人工

が自然に勝てないというわけである。しかし一般にはこのナイロンの出現はラケットの量産に大きな福音であった。ラケットのガットといえば、今日では腸の意は薄れて絨の意となってしまった感がある。盲腸のことを The blind gut ということから、もう一度羊腸がラケットに果たしてきた功績を称えてやる必要があろう。

注

- 1) F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports, 1963, p. 891.
- 2) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 13, p. 791; F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports, 1963, p. 891 ~2; 石黒修, テニス, 昭和 44, p. 10; 大谷, 野口等, 体育大辞典, 1957, p. 750; 玉川大学, 玉川百科大辞典, 昭 38, 29 卷, p. 507.
- 3) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26, p. 628; Amer. Book—Stratford, Modern Reference Encyclopedia, 1969, Vol. 19, p. 36; F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports, 1963, p. 892; 堀田登, 近代スポーツ発展の系譜, 昭 42, p. 143.
- 4) Gerald J. Hase, Irwin Rosenstein, Modern Physical Education, 1966, p. 207.
- 5) 熊谷一弥, テニス, 大正 12, p. 1~2.
- 6) 堀田登, 近代スポーツ発展の系譜, 昭 42, p. 130.
- 7) F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports, 1963, p. 892.
- 8) 平凡社, 世界大百科事典, 1969, 15 卷, p. 595.
- 9) 久保圭之助, テニス, 昭 38, p. 201.

テニス用語の起源

Tennis の語源

テニスの元祖は、手の平で球を打ったことからファイブズ (Fives) とか、ポーム (La paume, jeu de paume), ハンド・ボール (Hand Ball) などと呼ばれていたことは前述したが、これが 1360 年¹⁾頃イギリスに入って“テニス (Tennis)”と名づけられるようになった。

この Tennis なる名称の起源についてはいろいろの説がある。まず Encyclopedia Britanica の Tennis の項の History の部を原文のまま引用してみよう。

History.—Tennis may well be called a royal game, having been

popular with various kings of England and France, though it is fanciful to connect it with Homer's Nausicaa, princess of Phaeacia (*Odys.* vi. 115), who is represented by him as throwing, and not as hitting the ball to her maids of honour. In the ball-games of the Greeks and Romans we may see the rudiments of the French *jeu de paume*, which is undoubtedly the ancestor of modern tennis in a direct line. The origin of the name is quite obscure. Some give a numerical derivation from the fact that *la longue paume* was played by ten players, five on each side; others regard it as a corruption of *tamis* (sieve), for in a form of *la paume* the server bounced the ball on a sieve and then struck it: there is no possible reason for connecting "tennis" with the term Tenois, or Senois; most probable is the derivation from *Tenez!* (Take it! Play!), especially when we remember the large number of French terms that adhere to the game, e.g., *grille*, *tambour* (drum, from the sound on the board that formed the face of that buttress) and *dedans*.

Homer は、彼の物語のなかで、Phaeacia の王女 Nausicaa が女官たちにボールを投げかける——ぶつつけるのではなく——場面を描写しているが、それとテニスとを結びつけるのは、奇抜ではあるがやはり、イギリス、フランスの国王たちの中で盛んであった関係から、テニスは王侯のゲームである、と行ってよかろう。ギリシア、ローマ人の間の球戯のなかに、まぎれもなく現代のテニスと直接つながっているフランスの *jeu de paume* の原型がみられる。その名の起源は、非常にあいまいである。*la longue paume* が片側5名ずつ、計10名で行なわれることから、数より派生した名であるともいわれ、また一説には、*tamis* (ふるい) のなまったものだ、とするものもある。それは、*la paume* では、サーバーがふるいの上でボールをポンとはずませ、次にそれを打ち出すからである。“テニス”を Tenois, あるいは Senois と結びつけるのは無理のようである。もっとも確実性のあ

るのは、Tenez (取れ！、そら！、プレイはじめ！) という語からの派生である。特にこのゲームに関連する多くの用語、たとえば、grille とか、tambour (buttress…ひかえ壁の面を形成している板の上の音にちなんで太鼓という意) や dedans などがフランス語であることを思い合わせると、そういえるわけである。

Menke の The Encyclopedia of Sports (P. 892) によれば、tennis という語がフランス語の “tenez” から来たというのは、Mr. Jusserand の説であるといい、有名な英言語学者 W. W. Skeet もこの意見を支持していると述べている。

以上のように、テニスの語源には、la longue paume というテニスの原型が 10 人 (ten) で行なわれたことから由来したという説と、la paume (15~16 世紀にフランスで流行したテニスの源となった球戯) で用いた tamis (フランス語で、ふるいの意、英語の sieve) から出たという説があるが、この二説よりも確実性がある、多くの人から支持されているのは、“Tenez!” 説である。すなわち、フランスに旅して、このゲームを見たあるイギリス人が、帰国して、それを自国に伝えようとした際、不幸にもフランス語の素養があまりなかったため、そのゲームの名称をきかれたが、返答に困り “Tenez” と答えてしまったらしい。“Tenez” とは、フランス語 “tenir” の命令法で「さあ！」とか「そら！」という意で、ゲーム開始の際にサーバーがこの掛け声を叫んで打ち始めるならわしになっていたので、彼の耳に強く残っていたのであろう。英語なら “Take it” とか “Play ball” というのと同じである。これが英語式綴りの Tennis となって広まったというのが本当のようである²⁾。そしてこの「tennis」という言葉が作られたのは、1360 年³⁾のころだと、いわれている。

木村毅著の「日本スポーツ文化史」を見ると、

“明治 36 年の暮にさしかかった時だが (当時私は尋常小学校の 4 年生)、先生が校庭の一部に白い兔網のようなものを張って、球をポンポンうち出した。打つ前に球をかかげて、相手に向い「ノーティス」という。「インキ」とか「ランプ」とかいう日本化したの

ではなく、生のままの英語を私がおぼえた最初の字は、このノーティスだった。つづいてネット、ラケット、またはワン・ゼロとかアウトとか、ノーカウントなどの言葉もおぼえた⁴⁾。”

と述べている。これによると日本でも、明治頃のテニスは、最初に打ちだす者が相手に「notice」と呼びかけて注意を喚起していたことがわかり、もちろんこれはナマの英語であり英米でもこのような形で行なわれていたことが明瞭である。まったくフランスでの“Tenez”〈トネ！〉と一致している。

さらに「テニス」なる言葉の起源説として、エジプトのナイル河口にあった古代都市の名前「Tinnis」に由来するという面白い説がある。このことについては、Menke の The Encyclopedia of Sports に次の如く述べてある⁵⁾。

Another theory is that the name tennis was derived from an ancient city on the Nile River Delta in Egypt. The city was named Tanis by the Greeks but in the Arabic tongue it was called Tinnis. Late in the 12th Century, according to this theory, French Crusaders brought back from the Arabic speaking countries certain words and forms. One of these was the Arabic word “rahat.” It means palm of the hand and, according to scholars, is the origin of the English word racquet. Another Arabic word was hazard, meaning dice and, later, chance. Hazard, is a term used today in court tennis.

The city of Tinnis was known for its manufacture of fine linens, and the earliest balls used in tennis were made of light fabric. Quite possibly, according to this theory, the famous “tissu de tennis,” or light fabrics of tennis, may have been the source from which the name of the game was derived.

これによると、アラビア語では Tinnis 市だが、ギリシア語では Tanis 市で、この Tanis という地名は現在でも、ナイル河口、デルタ地帯の詳細な地図には載っている (The Times Atlas of the World,

79 plate 参照). すなわち、カイロ市の東北方約 110 km ぐらいの所で、マンザレ湖 (Lake Menzala) 岸の東経 31.9 度、北緯 30.9 度の所にある都市である。

この Tinnis 市は、よいリンネルの産地として知られていた所であり、大昔のテニスボールは軽い織物を用いて造られていたので、「Tinnis の織物」ということが起因となって、ゲーム名が由来したのだらうというのである。

テニスなる名称の起源説は以上のようなものであるが、15 世紀にはイギリスにおいて、テニスのスペルは、「Teneys」「Tennys」「Tennes」「Tenis」「Tenise」⁶⁾などがあり、その他「Tenys」「Tenetz」など⁷⁾も用いられた。

中国語ではテニスのことを網球 (ワンチュウ) といっているのも、前述の木村氏の“白い兎網のようなものを張って”といっているのと思ひ合せて大変面白い。

ついでながら日本で Base Ball を野球と訳す前に、“低球”として使った文献がある。常識的には庭球のミスプリントではないかと思うであろうが、確かに野球であることは、ピッチャー、キャッチャーなどと共に用いられている点からも明らかである。それは、明治 31 年 5 月 1 日発行の「太陽」という雑誌に、

“さきに東京第一高等学校学生は、横浜において、東京において外人と技をきそい、高点なる勝利を得てければ、忽ち海外にも評判つたわりて、今回はチャンのチャンと称せらるるエル大学遊技部のピッチャー、キャッチャー主唱となりて、第一高等学校遊技部へ書をよせて低球競技をいどみ、貴校学生弊国に渡航せらるるか、我れ貴国に渡らんか、いずれにしても旅費その他一さいの費用は、敗者負担の事たるべしと申こみたりと云う。奮起して渡航すべし”

とある。当時第一高等学校はベースボールで日本において断然強く他に敵がなく、海外からもこのような挑戦を受けたわけである。正岡子規が明治 20 年前後のベースボールについて多くの文章を書き残している中に、

“ベースボールははまだ訳語あらず、今ここに掲げたる訳語は吾等の創意にかかる。訳語適当ならざるは自らこれを知るといえども、匆卒の際改訂するに由なし”

といい、ホーム・ベースを本基、セカンド・ベースを二基、ショート・ストップを短遮、ホームインを廻了などと書いている。

したがってベースボールの訳語がなく、明治 31 年に雑誌“太陽”が「低球」と訳したのは、ベースボールの「Base」を基底、基盤、底、土台などの直訳から考案した訳語で、正当な理由があったと考えられる。その後野球なる日本語が作られ、ローン・テニスが庭球と訳されたのは対照的で、大変上手な優れた言葉であると思う。Foot ball を中国では足球(ツウチウ)といい、日本では蹴球と訳出している。Basketball を籠球というのは、全くの直訳であるが、バレー・ボールは Volleyball であり、正しくはヴォレー・ボールと発音すべきであろう。Volley とは、球が地につかないうちに打ち返すことで、日本語の排球の訳は、球を両手で押しひらくようにして突き返すという意味から作った名前である。同一スポーツの各国名称を訳出、比較するのも面白いことである。

ラブ (love…零点) の起源

現在、硬式テニスの試合において、審判員が、得点を数える時に使用している言葉は、軟式テニスとは異なっていて、無得点(零点)のことを「ラブ」(Love)といい、1 ポイントをフィフティーン (Fifteen)、2 点をサーティ (Thirty)、3 点をフォーティ (Forty) といっている。この唱え方は軟式テニスなどと違って特殊であるが、その由来について、これまた各種の説がある。

零点をラブ (Love) ということについては、もともとフランスで零点の時に、Oeuf (ウフ) と呼んでいた。“Oeuf”とはフランス語で卵のことであり、卵はその形が 0 の字と同形であるところから零に通ずるとして、シャレ好きのフランス人が茶目気を出して呼んだのであろう。ところが、前述のイギリス人がフランス語の心得がなかったために正確に伝え得ず、Oeuf を love と発音してしまったらしい。あ

るいは Ouef に冠詞をつけて l'oeuf (ルーフ) 英語なら the egg としてしまい、それが英語の Love になってしまったのだという説である。別の説としては、英語で「for love」には「無料で」とか「無報酬」という意味があるので無が零に通ずるとして、零点を love と唱えるようになったという人もある。この love はホイスト (4人でやるトランプ遊びの一種)、テニス、フットボールなどにおいて、無得点を表わすのに使用される語となり、零点の側がラブ (love) と呼ばれるようになり、これがテニスのカウントに使用し始められたのは 1678 年のことである⁸⁾、という説もある。

また一説には、テニスが庶民の間にはやった頃、盛んに賭け事に用いられた時代があり、そのとき「ただ」の意味でラブが用いられたのだともいう。Neither love nor money (ただでも、金をもらってもいや) の love のように、と太田氏は述べている⁹⁾。この Neither love nor money は元来は「色づくでも金づくでも」とか、「義理づくでも金づくでもいや」という意味から、金尽く、すなわち日本の金を山ほど積んだとて、嫌なものはいやという意であろう。

Fifteen, Thirty, Forty を使用した理由

硬式テニスで、得点 1, 2, 3 を、フィフティーン、サーティ、フォーティと呼称した来歴は明らかではないが、ローヤル・テニス時代に採用されていたコール法をそのまま習慣的に踏襲しているらしい。

これについての説明には次のようなものがある。

硬式庭球の得点の呼称には特別な用語を用いている。

0……love	3……forty
1……fifteen	4……game
2……thirty	

これは、フランスの貨幣の数え方に起源があり、テニスが賭の対象であった時代のなごりだといわれている¹⁰⁾。

また、H. I. Driver は、“中世にはいて、テニスはイギリスに伝わり、そこでは貴族の間で行なわれた。得点法は複雑を極めて、一般の人には理解できなかったし、コートに莫大な費用がかかったので、

金持ちの独占物となってしまうていた。1874 年になって、初めて得点法が簡単になり、ルールは簡単な屋外芝生コートに適するものとなった。個々のポイントを記録するのに、fifteen, thirty 等々を使用するのは、次のようにして説明される。チェース (chase, テニスの打法の一種) またはセパレート・プレーは 1, 2, 3……とスコアされ、15 チェースで 1 点を与えた、そしてゲームは 4 点または 5 点で終了した。これはテニスの研究家が推量したいくつかの説明のうちの一つであるが、これが正しいように思われる¹¹⁾、と述べている。

このことを裏づけるかの如く、福田氏は、“スコアは「ラケット」(ここでは一種の競技) のものを採用した。すなわち、打ち方と受け方とにわかれ、打ち方だけの点が記録され、打ち方がポイントを失えば受け方となる。いずれか一方が 15 点 (エースという) を取ればゲームになる。ただし双方が 13 点ずつ取った場合は、サーブする前に受け方は、セット 5 か、セット 3 かいずれにするかを宣言する。つまり、その後 5 エース取るか、3 エース取るかという意味である。また 14 点ずつになった場合は、受け方がセット 3 にする¹²⁾、”と書き、さらに、“1787 年にヘンリー・ジョーンズという人が、全英クラブにローン・テニスを追加採用した。規則委員が任命され、鼓形のコートを長さ 78 呎、幅 27 呎の長方形に改良し、「ラケット」のスコアの代わりに、「テニス」のスコアを採用した。すなわち、15. 30. 40. というゲームの記録法¹³⁾である”，と述べている。

堀田氏は、チェースについて、“コート・テニスの複雑さは教会の回廊や酒場の中庭の特徴をふくむコートの歴史に基づいている。同一コートはどこにもない。ローン・テニスやラケットと異なる主な点は、コートの構造とチェース (Chase)、すなわちプレーシングが得点対象になることである¹⁴⁾”，と述べている。プレーシングは placing で place は場所、地点であるから、ある場所をねらって打つ、すなわち“ねらい打ち”である。

また、太田芳郎氏は、フィフティーンもサーティもかけのときの金額のつごうともいわれる、と書いている¹⁵⁾。

さらに太田氏は、“試合開始のとき、アムバイヤが審判台の上に立って、しかつめらしい顔をして「ラブ・オール (love all)」という。上品なゲームであるから、まず「すべてを愛せよ、アーメン」と祈ってから始めるのであるまいが、どちらかが1点をとると、fifteen love, または love fifteen となる。前者は「娘 15 の恋心」となり、後者は「15 の娘に恋をせよ」ともきこえて、何だかおかしなものだ”と、英語学者らしい冗談を交えて書いている。

love all で「すべてを愛せよ」と始まる硬式テニスは、まずサービス (Service) で始まるわけだが、service 本来の意味は奉仕 (serve の名詞形) で、その意味からすれば、相手が返球しやすい、ゆるい球を相手に提供すべきなのかも知れない。サーヴとかサービスという言葉はこうした意味で使われだしたのかも知れないが、試合ともなれば、そんなことをいってられない。相手が打ち返し得ないような強サービスによって、Service ace を得ようとしているのが現実の試合方式である。

試合が進んでどちらも3点ずつとるとデュース (Deuce) となる。これからは2点の差がつかぬとゲームにならない。そこで「あと2点とったら」の意味で a due からフランス語の a deux となり、それが英語の deuce となったわけである。デュースのつぎに1点とるとアドバンテージ (advantage) であるが、これはフランス語のアヴァンタージュ (avantage) からきている。

久保氏は“ポイントは次のようにコールされる。この呼称の語源は明らかではないが、ロイヤル・テニス時代に採用されていた呼称を習慣的に踏襲しているものと思われる。

ラブ (Love)	0	ポイントのこと
フィフティーン (15)	1	ポイントとった時
フィフティーン・オール.....	1-1	ポイントの時
サーティ (30)	2	ポイントとったとき
サーティ・オール.....	2-2	ポイントの時
フォーティ (40)	3	ポイントとった時

- デュース (Deuce) ……………3-3 ポイントの時
アドバンテージ (Advantage) ……………どちらの側でもデュース後
1点とった時
デュース・アゲン (Deuce Again) ……デュース後2点連取すれば
ゲームとなるが、1-1点と
なれば再びデュースとなる、
これがデュース・アゲンで
ある。

サーバーの得点がいつでも先にコールされる¹⁶⁾、”と述べている。

硬式テニスの得点の呼称の起源についての説明には以上の如きものがあるが、どうもこれらのいずれの説明も納得のいくものとは思われない。久保氏も述べているように、この呼称の語源は明らかではないというのが現時点での結論であるというほかはない。

注

- 1) 日本体協, 現代スポーツ百科事典, 1970, p. 370.
- 2) 大谷要三, 雑誌・学校体育 (スポーツの起源—テニス—), 昭25年11月号 p. 26.
- 3) 日本体協, 1)と同じ, p. 370.
- 4) 木村毅, 日本スポーツ文化史, 昭31, p. 108.
- 5) F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports, 1963, p. 192.
- 6) 太田芳郎外, 庭球 (キネシオロジーによる新体育・スポーツ新書5), 昭43, p. 14.
- 7) Webster's New International Dictionary, p. 2356.
- 8) H. I. Driver, Tennis for Teachers (小山又次訳, 最新テニス教室), 昭39, p. 17.
- 9) 太田芳郎外, 6)と同じ, 昭43, p. 17.
- 10) 平凡社, 国民百科事典5巻, 1964, p. 244.
- 11) H. I. Driver, 8)に同じ, 昭39, p. 17.
- 12) 福田雅之助, テニス (硬式), 昭31, p. 11.
- 13) 同上 p. 12.
- 14) 堀田登, 近代スポーツ発展の系譜, 昭42, p. 44.
- 15) 太田芳郎外, 6)と同じ, 昭43, p. 17.
- 16) 久保圭之助, テニス (ルール・ハンドブック) 昭38, p. 10.

フランスでの jeu de paume

テニスの元祖的ゲームは、B.C. 500 年頃エジプト、ペルシア、または、ギリシア、ローマでも行なわれていたと最初に述べたが、現在のテニスに直接つながっているポーム (Paume) は、アイルランドでハンドボールとして始められ、イングランドを経て 11 世紀ごろフランスに入り、La Paume と呼ばれ、王侯、貴族の間に流行し、ルイ十世、シャルル五世などはその熱心な愛好者であった。Paume はフランス語で「掌」の意である通り、はじめは実際「裸の手の平」でボールを打ったものであった。

屋外でも屋内でも行なわれ、屋外のものを Le Jeu de Longue (長い) Paume といい、屋内のものを、Le Jeu de Courte (短い) Paume と呼び¹⁾、Longue Paume は、片側 5 人ずつの計 10 人で行なわれていた²⁾。

フランスで最初のコートができたのは 1230 年であり³⁾、以後急激に普及発達し、ジュ・ド・ポーム (jeu de paume) と呼ばれて 16 世紀頃まで流行した。この球戯が 1360 年頃イギリスに渡り、フランスの「Tenez！」がなまって「Tennis」の名称が誕生し、さらにそれがフランスに入って「Court Tennis」とか、「Royal Tennis」と称された。

このコート・テニスの中世において、全欧で行なわれ、近代ローン・テニスの祖となったものである。これは非常にぜいたくな設備を必要としたので、一般庶民の手の届くところでなく、王侯貴族の間に行なわれた一種の社交遊戯でもあった。昔は、見物するにもシルクハットにモーニング姿と定まっていたほどで、現在でも、服装態度がやかましく、エチケットやコート・マナーが重視されているのは、こうした歴史をもっている一つの現れであろう。コート (court) という英語には、法廷とか宮廷の意味があり、Royal という英・仏語には、王のとか、王族とかの意があることから、この間の事情がうかがわれる。このようにフランスで宮廷の遊びであったことは、日本で「蹴鞠

…けまり」が、皇極天皇（642—644）の御代から、長く大宮人の間で行なわれていたのに似ていて、“Tennis, king of games and game of king”（テニスはゲームの中の王様で、また王様のゲームである）といわれたのも無理はない。太田氏の言葉を借りると、“大化の改新の話し合いのキッカケは、ボールを蹴りそこねて、脱げてとんだ中大兄の皇子の靴を、うやうやしくささげた中臣鎌足との、スポーツを通しての親しみから始まったといわれるが、有名なフランス革命の際、ヴェルサイユ宮殿の中のボーム遊びの場所 Court Paume で、1789年6月20日、会議が持たれ、その時の宣誓は、「テニスの中の宣誓 (Serget de Court Paume)」としてフランス革命史にのこっている。蹴まりとともに、しとやかな二つの遊びが、東西の大革命に縁があるのもおもしろい、”ということで誠に奇妙な因縁である。このようにフランスで城郭の中、宮廷内、僧院などに附属して造られたコートは大変ぜいたくなものであった。

すなわち 長さ110呎、幅38呎8吋の屋根と壁で覆われた屋内で、長さ96呎、幅31呎8吋のセメント、または木の床上で、コートの中央につくられた境界を越して、向う側の三方の壁にどこへでも手の平でボールを打ち込み、相手はこれを直接または二度バウンドしない間に再び手の平で打ち返すという競技のやり方であった。これが次第に賭けの対象となり、いつとはなく世人から見棄てられるようになった。15～16世紀頃はその隆盛を極め、当時バリーだけでも1,800余のコートがあったという。現在でも欧州には、このコートが20くらい存在している。造作費は約2,000ポンドとの記録がある⁵⁾ (The cost of a tennis-court is about £ 2,000) から、邦貨なら約200万円くらいかかったものと思われる。このようにして本家のフランスでは、いつの間にか衰微してしまい、イギリスに起こったローン・テニスの世界に広まっていった。

注

- 1) F. G. Menke, The Encyclopedia of Sports. 1963. p. 892.
- 2) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26, p.

628.

- 3) 大谷要三, 雑誌・学校体育, 昭 25 年 11 月号, p. 26.
- 4) 太田芳郎等, 庭球, 昭 43, p. 15.
- 5) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26, p. 627.

イギリスでのテニス

現在のローン・テニス (Lawn Tennis) は, イギリスに誕生したように思われているが, 決して突然イギリスで行なわれだしたものではない. 手の平で球を壁に打ち当て返ってくる球をまた手で打ち返すハンド・ボールがアイルランドやイギリスで行なわれはじめ, それが 11 世紀ごろフランスに入って La Paume となり, 12 世紀の初期から 16 世紀ごろまで, ジュ・ド・ポーム (jeu de paume) と呼ばれて流行した.

この室内競技としてのポームがイギリスに紹介されたのが 1360¹⁾ 年ごろで, テニスという言葉が使用され始めたのもこの頃であった (このことについては, テニスの語源の項に詳述した).

La paume がフランスからイギリスに渡って始められたが, イギリスの愛好者, とりわけ僧侶達は, 屋内のコートに莫大な費用 (約 2,000 ポンド²⁾…約 200 万円) がかかることと, イギリスは芝生がよく生えることから芝生の上でやるようになり, 屋外でも気楽に楽しめるので, ますます盛んになり, フランスで賭の対象となったり³⁾, ぜいたく過ぎて一部上流階級のみ遊びであったりしたことから衰微したのに対し, その後は全くイギリスのものとなってしまう, 1874 年に「ローン・テニス」として生まれかわったのである. このためにテニスはイギリスが元祖だと思っている人もある.

フランスの jeu de paume が, イギリス人によって, イギリスに持ち込まれ, テニスという名前が誕生したのは 1360 年頃といわれている. その後, 現今とは異なる形で僅かながらイギリス国内に存在し, 1500 年代に, イングランド南西部の Somersetshire 州の人々が, 芝

生の上にテニスコートの形を方形に区画した線を引っぱり、その中央に十文字の線を作り、この中でボールと網とを持って技を闘わし、エリザベス女王(1533—1603)の観感に与ったことがあったという⁴⁾。

このように、イギリスはハンドボールという原料をフランスに提供して、これがフランスで、ジュ・ド・ボームとよばれる製品になりイギリスに逆輸入されて、Tennis と名づけられた。そして 1365 年には、エドワード三世(1312—1377)の命により初めてコートが作られ、王自らもそれを好まれて、以後全イギリスに拡まったといわれている⁵⁾。

15, 16 世紀頃にテニスのボールがフランスから非常に大量に輸入されたので、イギリスの製造工場である「Ironmongers' Company」は、ボールに関する保護貿易を 2 度にわたって——最後は 1591 年——請願したほどであった⁶⁾。

さらに進んで、1767 年には 20 人のクリケット・クラブ員に属していた William Hickey という人が中心となって、ロンドンの郊外で自分達で改善して名づけた「フィールド・テニス…Field tennis」を楽しんでいた⁷⁾。

1832 年には、これとは別に、Field Tennis が行なわれた絵があるし、1860—70 年頃にはイングランドの各地において、だんだん興味ある戸外のラケット・ゲームとして楽しめるようになっていた。これらの愛好者は、テニス・コートが高価過ぎて手が出せなかったので、フィールド・テニスとして戸外で行なったのだということは、特にその発達上忘れてはならない重要なことで、この苦肉の方法がローン・テニス誕生の要因となったのである。

1829 年には、Lord Arthur Hervey (アーサー・ハーベイ卿…当時バス “Bath” およびウェールズ “Wells” の僧正で、後にブリストル “Bristol” の僧正となった)によって、サフォーク “Suffolk” の彼の館の芝生で、友人達としたゲームが改良され、18 世紀末には早くも、「野外テニス」がクリケットの人気に匹敵するものとして「Sporting Magazine」に説明されていた⁸⁾。

1873年12月のクリスマスのガーデン・パーティーの際、ビクトリア女王の近衛騎兵少佐 (Major) であったウォルター・クロプトン・ウィングフィールド (Walter Clopton Wingfield) が、Wales の Nautolwyd⁹⁾ という氏の所有地の田舎家で、来客達に芝生の上のテニスの競技法を発表紹介した。これは昔から貴族のゲームとして行なわれてきたコート・テニスを改作したもので翌1874年には、コートの区画線をテープで作る「持ち運びのできるテニスコート」として特許申請をした。そして氏はこれをスフェーリスティック Sphairistike と名づけた。Sphere には英語でも球の意があるが、sphairistike にはギリシア語で球技とかプレーの意味がある。彼の考案したコートは砂時計型であった。

この時、氏が発表したルール・ブックには、次のような言葉が書いてある。

「テニス・ゲームは、sphairistike (ギリシア語で“プレー”の意) の名で古代ギリシアにその源を求めることができる。そしてその後は、pila の名でローマ人によって行なわれた。シャルル五世の治世にはフランス貴族の粹なゲームであったし、ヘンリー三世の時代にはイギリスを風靡した。ゲームそのものがむずかしい、コート施設に少なからぬ費用がかかるため、最近 (1873年当時) はすっかり沈滞してしまっているが、いまやローン・テニスの発明によって、これらの障害は過去のものとなってしまった。ローン・テニスは、コート・テニスの面白味をすべてそなえ、老若男女を問わず屋外でプレーできる長所をもっている」¹⁰⁾と。

1873年、ウィングフィールドによって、ウェールズの芝生コートに発表されたこの新しいテニスというのは、次のようなものであった。

コートは縦60呎、横30呎で、芝とする必要はなく、表面が平滑であればよい。形状は中央でくびれたいわゆる砂時計型で、中央のくびれた部分の横幅は21呎で、この中央部に長さ21呎、高さ4呎8寸のネットを張る。中央ネットと別にサイドネットもつけられていたことが Wingfield のコートの特色であった。プレーが2人または4

人で行なわれたことは、現在のシングルスとダブルスと同じであった。得点できるのはイン・サイド側（サービス側）に限られ、アウト・サイド側（レシーブ側）は得点できない。ただ相手側をアウトにするだけである。これは現在の6人制バレーボールと同じである。ゲームは15 エースできまる。13 オール、14 オールとなった時は、アウト・サイドのプレーヤーは、3 エースか5 エースにセットする選択権が与えられる（これはバドミントンのセッティングと似ている）。

1874年11月に、Wingfeild は、前回の規定に若干の改訂を加え、コートの大さを84 呎×39 呎とし、砂時計型はそのまま、ネットは渋引きとして天候にも耐えるようにし、使用後は張り綱をゆるめるだけで取り払う必要をなくした。またラインはチョークと水の混合物で描くか、テープ、わらなわを張ってヘア・ピンで止めるという方法とした。試合ルールにも改訂を加えた。

1875年には、イギリス初期のテニスがヘンリー・ジョーンズによって紹介され、マリルボーン・クリケット・クラブ (Marylebone Cricket Club) の役員達の手で、統一規則書がつくられた。

初期の試合はすべてこのようなコートで行なわれた。ちょうどその頃、たまたまウィンブルドンに置かれていた全英クロケット・クラブ (All-England Croquet Club) が芝生コートをテニスのために提供し、ローン・テニス (Lawn Tennis) という呼称が生まれた。

第1回の選手権戦は、ここのコートで1877年7月9日、22名参加して、All-England Croquet and Lawn Tennis Club の主催で行なわれた。このときの最初の優勝者は、ロンドン生まれの、スペンサー・ゴア (Spencer W. Gore) というラケット (Rackets) の名手であった。

この時にコートは砂時計型から長方形に変わり、寸法も78 呎×27 呎と現行の大きさとなった。

ボールは最初のうちは単なるゴム球であったが、1874年に、ヒースコート (J. M. Heathcote) という人が、裸のゴム球に白いフェルトをかぶせた¹¹⁾のが、現在の硬球の起こりで、1927年になってイギ

リスで初めて縫目なしの球がつけられた。

この第1回 Wimbledon の全英選手権大会の開催によって、イギリスのテニス界は急に普及発展を示し、世界各地にまたがっていたイギリス領土はもちろん、フランス、ドイツ、イタリアその他の欧州各国、さらにアメリカ大陸までどんどん進展して行った。

この大会の優勝者は1907年まですべてイギリス人によって占められていた。1900年には、アメリカでデビス・カップ戦がはじまり、ようやく国際間の交流が活潑になってきた。

注

- 1) 日本体協, 現代スポーツ百科事典, 1970, p. 370.
- 2) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26, p. 627.
- 3) 太田芳郎外, 庭球, 昭 43, p. 17; 平凡社, 国民百科事典, 1964, 5 巻, p. 244; Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26, p. 902;
 16 世紀末においてフランスでは賭が net (網) や cord (綱, 索) の下で行なわれ, 莫大な金がゲームに賭けられ, 17 世紀には見せ物になり, プロ的選手も出現した。一方, イギリスでは 1750 年頃, プロ選手によって, 賭や八百長がかなり行なわれたので, 公共競技場での試合も評判が悪くなった。イギリスで Bisk (Bisque…テニスでハンデキャップをつけること) という語は 1697 年初めて出現したし, winning gallery も 1767 年以後から使われるようになった。
- 4) 熊谷一弥, テニス, 大正 12, p. 2.
- 5) 大谷要三, 雑誌・学校体育, 昭 25 年 11 月号, p. 27.
- 6) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 26. p. 629.
- 7) Americana Corporation, Encyclopedia Americana, 1958, Vol. 26. p. 432b.
- 8) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911. Vol. 16, P. 902.
- 9) 熊谷一弥, テニス, 大正 12, p. 2; P. F. Collier, Son Ltd., Collier's Encyclopedia, 1960, Vol. 18. p. 256.
- 10) 久保圭之助, テニス, 昭 37, p. 202.
- 11) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 16, p. 302.

ウィンブルドン全英選手権大会

1874年にウィングフィールド (Walter Clopton Wingfield) が考案して「スフェリスティック (Sphairistike)」と名づけた新しいテニス, すなわち別名ローン・テニスを 1875年にマリルボーンのクリケット・クラブ (Marylebone Croquet Club) 役員たちがその規格を改めた。その時ロンドンのヘンリー・ジョーンズ (Henry Jones, 1731—1810) が, ウィンブルドン (Wimbledon) のクロケット・クラブに紹介し, 1877年このクラブが, オール・イングランド・クロケット・アンド・ローンテニス・クラブ (All England Croquet and Lawn Tennis Club) と改称され, ウィンブルドンにあった同クラブのコートで競技会が開催された。これが第1回ウィンブルドン選手権大会である¹⁾。その時の注意書のなかに, 「各自自分のラケットを使用すべきこと, 踵のない靴をはくこと, ボールはコートの番人に申しでて受けとられたいこと」などが特記されている²⁾。かくしてこの大会ではじめてコートの大きさ, フォールトの規定, ボールの大きさ, 重さなどが定められ, 以来テニスの進歩発展に伴ってしばしば規則の改正が行なわれた。

この大会の開催によりイギリスの庭球界は急速な発展を示し, これが大陸にも影響して, フランス, ドイツ, イタリア, アメリカなどにも普及進展した。この大会の正式の名称は「全英ローンテニス選手権大会」(All England Lawn Tennis Championship) であり, はじめは, イギリス内だけの選手権大会であったが, だんだん外国選手の参加が許され, 実質的には全世界庭球選手権大会となってしまう, 世界でもっとも古い歴史をもつ大会となったわけである。第1回(1877年)の参加選手は22名であったが, 相当の観客があったと伝えられている³⁾。翌年の参加者は34人となり, さらに1879年には45人の選手が出場した。古代の闘技場 (Colosseum, 円形闘技場) を思わせる中央のコートで, 各選手はその技を競った。英王室をも御招待申上げ, プリンス・オブ・ウェルズ (Prince of Wales イギリス皇太子) には特

に個人的の援助を賜わるようになり、最初の会長となられたのみでなく、同クラブ主要トロフィー中の1個は、プリンスの寄贈によるものである。テニス愛好者にとっては「ウィンブルドン」は全く回教徒のメッカに相当するものであり、デビス・カップ戦が国と国との優勝を競うのに対し、ウィンブルドン大会は個人の世界一をきめる大会ということになる。

ウィンブルドンは、ロンドン西南約 13 km 郊外の牧場地帯のなかにある富豪達の郊外住宅地で、大ロンドンの中心ピカデリーから地下鉄で約 20 分、サウスフィールド駅に下車すると、大都市の雑踏から逃れて、実に静かな芝生を囲むニレの木の向うに教会の尖塔が見えるという別天地である。ここに現在では数万の観衆を容れられる大テニス競技場があり、その周辺に数十のテニスコートが設けられている。大会期日になると数万台の自動車が殺到して、何 km 四方も駐車空地がなくなるくらいの盛況を呈するという。

大会は毎年6月第4週のはじめから7月初旬頃までの間に行なわれるが、観覧券は、半年以上も前から予約しないと入手できず、当日券を手に入れるには前の晩から列をつくって頑張らなければならないのは、最近どこでも見られる現象と同様である。会期は6~7月のもっともよい季節であり、婦人服のファッション・ショーもひらかれ、誠に華かである。

このウィンブルドン選手権大会に、日本が初めて参加したのは1920年（大正9年）で、この時アメリカ随一のチルデン選手と決勝を争った清水善造選手の、スポーツマン・シップを発揮して健闘した物語は今でもよく語られる美談である。

この大会は1967年を最後とし、1968年からプロ選手の参加も認められるオープン競技となった⁴⁾ので、従来とは別な大会として新たに発足することとなり、長い歴史はここに一大転機を迎えたわけである。

スポーツマンシップやアマチュア精神を重んずるスポーツの母国イギリスで、しかももっとも歴史的伝統を有するウィンブルドン大会に

プロ選手が参加できるというのは理屈に合わないではないかと考えられるかもしれない。しかしこれには次のような理由がある。アメリカの有名なテニス選手チルデン (William Taten Tilden, 1893—1953), 彼はウィンブルドン大会においては 1920, 1921, 1930 年と 3 回選手権をとり、デビス・カップ試合においてはジョンストン選手と共に素晴らしい活躍をして、1920 年から 1926 年まで連続 7 年間優勝をしたという大選手であるが、1931 年にプロに転向した。その結果アメリカでは、テニスが発興としてもかなり成績があがり、その後有名選手が続々とプロ入りする傾向となり、そのためウィンブルドン大会は、プロ入りしなかった二流選手だけで選手権を争うという結末となり、伝統ある大会に淋しい現象をもたらした。そこで、ウィンブルドン大会は、プロであろうとアマであろうと、とにかく世界の最高峯の選手を集めて行なってこそ意義があるとの見解に立って、プロ選手の参加も認めようとなったわけである。オリンピック大会にテニスの種目が加わっていないのは、一方にこうした大会が行なわれているということも一つの理由になっている。

この大会は、全英選手権大会という名称でありながら、多くの他の国の選手が参加するのは、举行される時期が 6 月下旬から 7 月上旬になり、ちょうどデ杯戦の欧州ゾーン試合の間であるので、各国の有力選手が参加するのに好都合であり、国際的交歓の意味もあり国際的大会に発展したのである。

コートはすべてローンであり、種目は男女混合の各イペンツがあり、ほかにこの期間にジュニアの大会も行なわれる。

男子の種目は単 128 名、複 64 で英国庭球協会の推薦によって参加が許されることになっている。海外からの参加者は、各国庭球協会が推薦した者や、英国協会で資格ありとされた者は無条件で参加できるが、それ以外の者は、この大会の数日前に行なわれるクイーン・クラブの大会中に予選が行なわれ、これに合格した者何名かが加えられる。

日本から参加した選手では、前述の清水選手が 1920 年にアメリカのチルデン選手と決勝を争ったほか、故佐藤次郎選手が準決勝に進み、

佐藤・布井組がフランスのボロトラ・ブルニョン組と決勝した（1933年）のが最優秀の成績で、三木選手がラウンド嬢と組んで1934年に混合試合で優勝したのが、日本選手優勝の唯一の記録である。戦後では加茂幸子嬢が単身出場したが、3回戦でイタリアのイグリオ夫人に敗れ（1954、昭29年）、また加茂公成選手が1955年に同じく3回戦でアメリカのセイサス選手に惜敗した。1961年には石黒選手が出場したが、2回戦で敗れている。

注

- 1) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, Vol. 16. p. 302.
- 2) 太田芳郎, テニス読本, 昭23, p. 216.
- 3) 熊谷一弥, テニス, 大正12, p. 9.
- 4) 日本体育協会, 現代スポーツ百科事典, 1970, p. 370.

**デビス・カップ・マッチ (Davis Cup match) ——
——国際ローン・テニス選手権試合 (I. L. T. C.)**

19世紀の終りから20世紀初頭にかけて、アメリカにおいては二つの新興スポーツが急速に第一線に躍進したかの観を呈した。それは、テニスとゴルフであった。

1883年（明治16年）以来、英米間において、非公式のテニス試合がしばしば行なわれていた。そして名選手連が互に往来して技を練ることが頻繁となった結果、両国内のテニス協会の発意で毎年1回の国際競技会を開くことを定め、これを「国際ローンテニス選手権大会」(The International Lawn Tennis Championship) と名づけた。

1899年にアメリカからイギリスに遠征した選手の一人に、当時ハーバード大学の一学生で、セントルイスの素封家の生まれの、ドワイト・F・デビス (Dwight Filley Davis, 1879—1945) という選手がいた。彼はこの試合が両国親善にも非常に有意義であることを感じ、カップの寄贈を米国テニス協会に申出たところ、協会は受諾して直ちに英国テニス協会とも話し合い、1900年（明治33年）からこのカップ

がその対抗試合に賭けられることになり、試合も「デビス・カップ試合」として行なわれることになった。このカップは壮麗な大銀製のもので、優勝国が次回まで保持することにした。1911年に、国際テニス連盟が設立され、これを「International Lawn Tennis Championship」と称することになり、非常に権威あるものとなった。デビス氏は自らもこの試合に出場し、左利きの威力を発揮して、単複戦ともに快勝している。氏は端正な顔立ちと温健な心情の持主で、堂々たる体軀であった。後にフーバー大統領の陸軍大臣を経て、フィリッピンの総督(赴任の際日本にも立寄った、昭和4年6月)まで栄進し、アメリカ政界に名をなしたが、1945年(昭和20年)66歳で亡くなった。デビス杯の名は国際テニス界から永久に消えることはないであろう。

デビス・カップそのものは、ボストンのシュリープ・クランプ・エンド・ロウ会社でデザイン製作されたもので、純銀で高さが13吋(33 cm)で鉢と脚部がねじで継ぎ合わされていて、内部の直径が17.5吋(44.5 cm)、重さ6.15 kgあり、鉢の上部と脚の下部の縁には見事なジョージア風の意匠が施してある。鉢の内部は金メッキしてあり、鉢の縁を回って「International Lawn Tennis Challenge Trophy. Presented by Dwight F. Davis 1900」と刻んである。カップの外側には試合ごとに、試合場所、スコア、両国名、選手名、年号が刻み込まれたが、1920年には刻み込む場所がなくなったので、同様の意匠でニューヨークのブラックスター・エンド・フロスト会社に銀の盆を作らせ、その後また書ききれなくなり、1936年にその盆を載せる柱礎が作られた。これらはいずれもデビス氏の寄贈である。

最初に定められた規則では、英米両国間の試合の結果、勝った国がそのカップの所有者となり、次年度には敗けた国から出かけて行って試合し、勝利国が次の一年間所有権を得るということであった。その後この企てはたちまち世界の注目をひき、各国から参加を懇願されたため、1903年に規則を改めて世界各国に範囲を拡大し、ゾーンを定めて行なうようになった。

試合の方法は、一国を代表するダブルス一組、シングルス二人のテ

ームであり、勝敗はダブルス 1 試合、シングルス 4 試合の計 5 試合中、3 試合以上勝ったことによって決定することになっている。1904 年には英米のほかにフランス、ベルギーが参加し、1907 年から世界的に発展したため、1911 年に国際テニス連盟が結成され、デビス・カップ戦はこの連盟の管理下に行なわれることとなり、参加国の増加によって、欧州ゾーン、アメリカゾーン、東洋ゾーン地域に分け、それぞれ各ゾーンで予選を行ない、各ゾーンでの優勝国が前年の最優勝国にチャレンジする形式をとっている。

日本の最初の参加は 1921 年（大正 10 年）で、熊谷、清水両選手が出場した（はじめ熊谷、柏尾氏が選ばれたが、柏尾氏は練習不足と身体の故障のため清水善造選手が加わった）。日本は参加 10 カ国中、ヒリッピン、ベルギーに不戦勝、インド、オーストラリアを破って、チャレンジ・ラウンドまで進んだが、当時アメリカの世界的強豪、チルデンとジョンストン選手の全盛時代であったため決勝戦には、遂に及ばず敗退した。しかし日本が最初の参加で、チャレンジ・ラウンドまで進み、アメリカとデ杯の覇を争ったことは、世界のテニス界の眼を驚かし、日本内地の反響はこの素晴らしい成績に、一層のテニス熱をおおることとなった。この頃日本では各大学が硬球採用に入ってもない頃だった。

デ杯戦の組合せ抽せん会は、優勝国の元首が参加各国の大公使を招いて催し、デ杯のなかに入れられた番号を 1 本ずつ抽くという、独特の方法が用いられている。

試合は 3 日間にわたり、第 1 日に二つのシングルス戦、第 2 日目は一つのダブルス、最終日には第 1 日の二人の相手を取り換えた二つのシングルスの合計 5 試合であり、第 3 日目のシングルスプレーヤーは、2 日目までに一方が 3 勝してすでに両国の勝敗が決定した後なら、他の者と交替してもよいが、そうでない時には故障があっても第 1 日と同じ選手が出場しなければならないことになっている。シングルスとダブルスの顔ぶれは同じでも別人でもよい。したがって一国の選手は 2 人でも、3 人でも、4 人でも構成できるわけである。組合せは 24

時間前に交換するという規則がある。

参加した国は、試合地までの旅費、滞在費は自国の負担だが、もし試合地での純収入が総経費を支出して残金が出た場合は、試合地の協会は遠征して来たチームの3人分の旅費を負担する。なお残金が出た場合は両国で折半することになる。1921年（大正10年）日本で最初に清水善造、熊谷一弥の二人を派遣し、善戦善闘遂にチャレンジ・ラウンドに進出、アメリカのチルデン、ジョンストンに敗れたが、この時の分配金4万円を受けて帰国した。当時の4万円とは非常なる大金で、日本庭球協会の基金とされたが、他のスポーツ関係団体でこれほど多額の基金をもっている所はなかったという¹⁾。もしこのとき日本が優勝したら、次回のデ杯決勝戦は日本でやることとなり、日本庭球協会は創立早々で（大正11年3月11日創立）さぞかし嬉しい悲鳴で、てんてこまいしたことだろう。

各ゾーンでの優勝国が決まると、三つのゾーン（米州、欧州、東洋）優勝国同志の試合、すなわちインター・ゾーン試合がカップ保持国の指定したコート、日時に行なわれる。1966年から欧州ゾーンの上半部、下半部の各一国がゾーン決勝に参加することになり結局4ゾーンとなったことになる。

1900年にデ杯戦が始まって以来、チャンピオン・ネーションの栄誉を多く得た国はアメリカ、オーストラリアで、次いでイギリス、フランスの順となっている。

その他の世界的選手権大会

ワイトマン・カップ (Wightman Cup Tournament)

男子のデビス・カップに対して、女子の国際的対抗試合にワイトマン・カップ争奪対抗戦がある。これは1923年（大正12年）にアメリカの、Hazel Hotchkiss Wightmanが寄贈したカップである。女史は1909、1910、1911および1919年に全米女子シングルスの選手権保持という有名なテニス人で、結婚後はGeorge Wightmanとして知られている。はじめ英米女子対抗テニス試合は毎年英米両国の

間で交互に開催され、7ポイントの単複試合が行なわれていたが、戦後はアメリカ庭球協会からの提案で、デ杯方式による単2、複1の対抗トーナメントが、国際庭球連盟の主催で1963年から開催されるようになった。その第1回はイギリスで行なわれた。日本はアメリカ庭球協会のすすめによって、1964年のロングウッドの第2回大会から参加し始めた。

デ杯戦、ウィンブルドン大会に次ぐ世界的に大きい大会としては、毎年5月中旬にパリーのローランギャロウで開催される「全仏大会」や、7月にドイツのハンブルグで開かれる選手権などがあり、これらの大会には、アメリカ、オーストラリア、フランス、イタリアその他の各国からの選手が参加するので、各国テニス界の水準や動向を知るのにも重要な大会となっている。

また、8月から9月にかけては、全米選手権大会があり、全豪選手権大会は11月下旬に開催されている²⁾。

日本では「日本庭球協会」が創設された大正11年(1922)に全日本選手権大会が本郷の東京帝大コートで第1回が開催されて以来、毎年9~11月頃、関東と関西で交互に開かれ、すでに46回行なわれている。全日本女子大会は大正13年が第1回であった。

注

- 1) 日本庭球協会, 日本庭球協会十年史, 昭7, p. 52.
- 2) 久保圭之助, テニス, 昭37, p. 197.

アメリカでのテニス

テニスは、現在アメリカにおける「十大スポーツ」(アメリカで年間の観客を多く持っている十種目のスポーツで、野球、フットボール、競馬、オートレース、陸上競技、ボクシング、アイスホッケー、ゴルフ、バスケットボール、テニス)¹⁾の一つに挙げられるが、他の多くのスポーツと同様にイギリスから導入されたスポーツの一つで、その初期においては、富裕階級のクラブによって独占されていたことは、いうまでもない。そして1890年代に入ってから急速な進展をみせている。

すでに述べたように、イギリス、ウェールズの M. W. Wingfield という人が 1873 年のクリスマスの会合に、Nautolwyd の田舎家で、スフェリスティック (Sphairistike…ギリシア語で球技の意) という戸外テニスを考案して発表した。この新しいゲームは、間もなく大西洋を横断して、バミューダ島 (Bermuda Island) に駐在していたイギリス守備隊でも行なわれるようになった。1874 年²⁾の春、アメリカ・ステートン島の女子学生、Mary Ewing Outerbridge 嬢は、バミューダ島に旅行してこのスポーツを見て感ずる所があったのであろう、帰国の際に用具一式を持ち帰った。(この時、税関ではこの珍しい用具の関税について当惑したが、結局は無税にしたという話が残っている)。幸いにも、このアウトブリッジ嬢の兄 (A. Emilius Outerbridge) は、ステートン島のクリケットおよび野球クラブの会員であったので、彼女は兄を通して、クラブ・グラウンドの一隅にテニス・コートを作ることを許された。そしてこの「スフェリスティック」はいつのまにか「ローン・テニス」と呼ばれるようになってしまい、アメリカに一つの新しいスポーツが誕生したのであった。

このローン・テニスは、スピーディなスリルと深い技術の必要性からだんだん男性の関心をひき興味を覚えるようになり、男性間に普及して行き、続いてニューヨーク、ニューポート (New Port…ロートアイランド州)、ボストン、フィラデルフィアなどにも普及して行った。

また一方では、1874~5 年に、ウィリアム・アップルトンという人がテニス用具一式を輸入して、マサチューセッツ州ナハントにある氏の別荘内にコートを作り、そこで、ジェームス・ドゥワイトや F.R. セアーズなどにプレーさせたという。このコートがアメリカにおける最初の正式コートであった。

別説として、1870 年代に Robert Moore によって紹介されたという記録がある³⁾。それは “Tennis was introduced to the U. S. in the 1870s. The game was played regularly at the Racquet Court Club in New York in 1876 where Robert Moore was the professional

instructor.”とあり、1876年には professional instructor が在存したことを示しているが、これは体育教師でテニス専門の指導者という意味ではないかと思われる。

そしてこれが、1874年に Outerbridge 嬢が紹介したものとつながりがあったのかどうかは明らかでない。

アメリカにテニスが導入される以前に、アメリカでは各地に、クリケット・クラブがあり、そのクラブの芝生は、テニスにも適していたので、この新しい興味と技術性に満ちたスポーツに魅力を感じ、青年達は従来のクリケットよりもこの方に熱中するようになったので、クラブの幹部連には不満の気分が見られたが、伝統に拘束されない若い精神はテニスのみにも熱中したため、先に野球の興隆によって勢いを失いかけていたクリケットはますます衰微の一途をたどる運命に立たされた。すなわちクリケットは長時間を要し、観衆に与える刺激、興味も乏しく、ヨーロッパの諸国に列すべく新興の意気に燃えていた当時のアメリカの社会的状況にマッチせず、クリケットは、イギリスのようにアメリカには育たなかった。クリケット・クラブそのものは亡びず名称は残ったが、実質内容はテニス・クラブとして残ったのであった。その結果、1880年までにアメリカ東部においては30以上のクラブがテニスコートをもつようになった。

このようにして、移入された初期におけるアメリカのテニスは、その使用球さえ区々であり、もちろんルールも統一もなかったが、1881年3月ステートン島、クリケットおよび野球クラブの E. H. アウターブリッジ (メアリーの兄)、ピーコン・パーク競技協会のシェーイス・ドゥワイトおよび全フィラデルフィア・テニス委員会のクラレンス・M・クラークなどが中心となって合衆国ローン・テニス協会 (The United States Lawn-Tennis Association) を創設し、統一ルールによって全国的トーナメントが開かれることとなり、その第1回大会が、ニューポートにおいて開かれた。

1883年には、ステートン島婦人戸外スポーツ・クラブが、女性を対象とする大きなトーナメント大会を開くに至り、かくてテニスはア

アメリカにおいて、女性が本格的に参加した最初の組織的スポーツとして意義がある。

イギリスより東部に導入されたテニスの流行は間もなく、西部の太平洋岸にも伝えられ、1887年には、カリフォルニア州第1回選手権トーナメントが開催されている。

1900年に、ハーバードのドワイト・F・デビス (Dwight F. Davis) が、英米対抗テニス・ゲームのために大銀製カップを寄贈してから、英米間のテニスは一般世人の注目を浴びるようになって発展の原動力ともなった。

19世紀末に創始された大学選手権、国内選手権トーナメントは次第に隆盛となり、はじめは上流階級によって独占されていたテニスもだんだん中流、一般にも普及し、公設グラウンドにもテニスコートが併設されたりして、年とともに多くの人々の間にまで浸透して行った。かくして施設、ルールの整備統一なども完備したテニスは、技術面の進歩を見せ、「テニスの王者」と称されたチルデン (William Taten Tilden) などの偉大なる選手を出すにいたり、1931年頃にはプロ・テニスの誕生を見るに至った。

注

- 1) 山中良正, アメリカスポーツ史, 昭 35, p. 211.
- 2) P. F. Collier, Son Ltd., Collier's Encyclopedia, 1960, p. 257.
- 3) Univ. of Cambridge, Encyclopedia Britanica, 1911, vol. 13, p. 792.

日本のテニス

テニスの伝来

日本でテニスを最初に行なったのは、アメリカから伝道のために来ていた宣教師で、明治初年¹⁾というだけで、その時期についてはいろいろの説²⁾がありはっきりしない。このことについては、日本体育協会編の「スポーツ八十年史」225頁、「日本スポーツ百年」271頁に、「テニスは宗教が普及する、というところちょっと妙な表現ではあるが、

外国では宣教師が海外伝道のために単身僻遠の地に赴く際、自分の孤独の慰めにテニス道具を持参し、伝道地で人にも教えその発展への一端に資したことが多い。わが国のテニスの渡来にもそうした事例があったようで、文献にも見えるが、それは局部的のもので、たとえば横浜や神戸の外人居留地で外人間に行なわれていたこの競技を、出入りの生糸商人が学んでこれを甲府で試みたという話もあり、また海外遊学の日本人達がこれを持ち帰って試みたという話や、故安部磯雄氏が岡山へ始めて伝道師として赴任された時、自ら試み人にも教えたという直話もあるが、一番正式にこの技を紹介したという通説になっているのは、明治11年文部省の体操伝習所の教師として招聘されたアメリカ人リーランド (George Adams Leland, 1850—1924) 氏が、本国から(用具を)取寄せて生徒に指導し、その普及を計ったということで、それもただ、当時これを紹介しただけに止まったようである。その後この体操伝習所は組織が改められ、現在の教育大学の前身である東京高等師範学校に附属されることになった。そしてこの競技もこれに伴って伝えられた。明治17年、当時わが体育界の先覚者である坪井玄道氏がこの学校に赴任した時も、テニスはいささかであるが校内に行なわれていたことは確実であった。しかし用具であるラケットとかボールなどはとうてい内地で製造されるに至らなかった時代であったから、技の普及などももちろん問題でなかった。その後比較的多量に輸入されていた玩具用のゴム球を代用したのではないかと思われる」と詳細に述べてあるので、当時の大体の状況が判断される。

すなわち、これによると明治10年頃、外国の宣教師が横浜、神戸などでやり初め、日本の生糸商人がそれをまねてやったのが日本での最初のものであるが、実はそれより早く入ったという記録がある。テニスとは関係ないが、ラケットは、オランダ羽子板の羽根(ウーラング)と共にずっと早く、長崎出島のオランダ館に伝わっていたことが、紅毛雑話に記されている³⁾。森島中良著のこの書に「羽子板並羽根」と題して、「黒坊の弄もてあそびなり西洋館にて閑暇でしなる時は、遣ひま羽子ハリハゴをつき遊ぶとなり、羽子板を“ラケット”という羽根を“ウーラング”と

いう」と。これは日本の羽根つきに似た遊びで、バドミントンの前身とも見られるが、とにかく「ラケット」が 1787 年（天明 7 年）には日本に来ていたことがわかる。徳川 11 代家斉將軍の時で、明治に入る 81 年も前の頃であった。外来スポーツ用具としては最初のもものと見てもよい。

テニスそのものが明治 10 年以前に日本に伝わったという点については、針重敬喜氏の「日本のテニス」に、“明治六、七年頃高楠順次郎、南岩倉具威男などがやったと伝わって居り、同じ頃神戸に在留する外人間にもテニスをやるものがいたと当時の実見者が語っているから、明治の初年には早くもテニスが日本に入って来たことは事実である⁴⁾”とある。

しかし、高楠順次郎（仏教学者、武蔵野女子学院創立者、1866—1945）は慶応 2 年広島県八幡村の農家に生まれたので明治 6 年にはまだ 8 歳のはずだから、この記録には疑問がある。氏は明治 23 年（1890）25 歳でオックスフォード大学に入り、27 年卒業後ドイツ、フランスに学び、明治 30 年 32 歳の時帰朝しテニスをやったことは事実である。（高楠順次郎先生 23 回忌記念、雪頂のこころ、昭和 42 年 6 月 28 日、武蔵野女子学院出版による。）明治 6, 7 年頃高楠順次郎がやったということは間違いであろう。南岩倉具威男という人については、どう調べても不明であった。

このようにして、外人宣教師、リーランド⁵⁾、坪井玄道氏によって、明治初期に紹介された硬式テニスは、ひとまず東京高等師範に種子がまかれ、また、“学校以外では三井守之助、磯村豊太郎などが、今の三越のある駿河町辺にコートを作ってテニスをやっていたという話を古老が語るが⁶⁾”とある如く、僅かに当時のモダンボーイが試みたに過ぎなかった。

しかし当時困ったことは用具、特にボールの補給であった。ボールはゴム球に布かフェルトをかぶせたものであったが、硬式ローン・テニスといっても、当時日本では十分手入れもされていない地面のコートだったので、消耗も激しかったであろう。始めてはみたものの用具

の輸入が思うように行かなかったこと、高価でもあった。日本の如き当時の後進貧乏国では普及するには条件が悪かった。しかし窮すれば通ずとか、玩具用のゴム球を試用してみた結果案外好調であることがわかり、高等師範では、明治 23 年（1890）三田土^{ミチツチ}ゴム^{ゴム}会社に委嘱してテニス用のゴム球を製造させた。これが現在も使用されている赤 M ボールの元祖であり、こうして世界に唯一独特の軟式テニスが日本に誕生したわけである。

この三田土^{ミチツチ}ゴム会社は、明治 19 年 12 月土谷秀三が本所横川橋に創設した日本最初のゴム工場で、はじめは土谷ゴム製造所と称し、三田土ゴム製造合名会社となったのは明治 25 年のことである⁸⁾。同族共同で個人的に経営されたもので、三田土なる社名も土谷秀三の三と土と、さらに同族共同経営者のなかに田のつく姓名の人が加わっていたのであろう。そこの技師長は、やはり同族の谷口勝次郎という人で、氏が高等師範から委嘱を受けて初めてテニス用のゴム球を試作提供し、だんだん改良されたのであった。はじめ M 印ゴム球と称したが、もちろんこれは三田土のイニシャルの M であり、現在は昭和ゴム会社となっているが「赤 M ボール」と称して、ボールに赤色の M 印マークがつけられているのは誰も知る所である。

土谷ゴム製造所の前身は、海産物の採集業で、潜水衣や送気ゴム管の修理加工から、ゴム製品の製造に関心をもつようになり、明治 16 年頃からゴム工業に乗り出し、ついにゴム製造業に転身したという明治時代の産業の一断面を見せている。

明治事物起原⁹⁾の「庭球の始」の項には、“我国庭球輸入者は誰なるや未だ窮めざるも、麴町永田町なる東京クラブこそ、其の元祖なるべしという。明治 17,8 年頃の輸入なるべきも真に一部の間に玩ばるるに過ぎざりき。然るに此技、何時の間にやら高等師範学校の生徒によつて学ばれ、この紹介者たる高師より、更に高等商業学校生徒に伝習せられたるは、明治 29 年の秋なり。高師、高商の特にこの技に秀でたるものを出すは、これがためなり”とあるが、これはリーランドや坪井氏のテニス紹介には触れていない。

また、「庭球五十年」のなかで福田雅之助氏は、「樺山老の懐旧談」の項に“樺山愛輔老は、明治 13 年 (1880) に 15 歳の若さで渡米した。大学は新島襄、内村鑑三、神田乃武などの出たマサチューセッツ州のアムハーストであつた。氏は『日本人でテニスをしたのは、私が初めてでせう』といはれた。明治 13, 4 年頃に早くもラケットを握つたのだから、氏が日本の最初のテニスマンであらうと思はれる。米国のチャンピオンで、7 年連勝したシアースと試合をしたことがある、いいスコアを残したといはれたから相当な腕前だつたのだらう”と書いている¹⁰⁾。確かに本格的にテニスをやった最初の日本人かも知れない。

とにかく、日本には上記のような、いくつかのルートを経て硬式庭球が外来の用具と共に入って来た。そして日本という国土に合うように、軟球が工夫されたのである。

このように何とか普及の道を見出した日本の軟式テニスは、高等師範に播種されたということもまた幸運であった。東京高師には体育教員養成の課程があり、前述の坪井玄道は「戸外遊戯法」という外来スポーツ紹介の著を明治 18 年に田中盛業と共著で出しており、高師でも種々の戸外遊戯を指導した。したがって、高師では体育課程のみでなく、文理科系の学生もこの珍しい新入テニスを行なうものが多くなった。しかも高師の卒業生は全国中等学校（師範学校、旧制中学校、高等女学校など）に教師として赴任し、在学中習得した野球、サッカー、陸上、テニスなどの外来スポーツの宣伝普及に少なからざる役割を果たしてくれたのである。

坪井氏等の「戸外遊戯法」は、日本最初のスポーツ解説書で、大体は欧米の翻訳らしいが、当時テニスがどのように紹介されたかを知るために転載しておこう。

坪井、田中の「戸外遊戯法」と、ストレンジの「Outdoor Games」

明治 18 年 2 月、坪井玄道が田中盛業との共著で出版した「戸外遊戯法……一名戸外運動法」なる著の第十九章に「ローンテニス」の解説が述べてある。以下その部をそのまま記載してみよう。

「ローンテニス」ハ男女老幼巧拙ノ如何ヲ問ハズ之ヲ演習シ得ルノ遊戯ナリ。今其方法ヲ叙スル前ニ「コート」即チ遊戯場ノ模様ヲ略説センニ「コート」ノ大サハ素ヨリ實際ニ付テ広狭ヲ定ムベキモノニシテ様ニ規定スルコト能ハザレドモ今其通常ノモノヲ挙ゲレバ大凡5尺ノ高サノ棒二本ニ着ケタル網ヲ以テ「コート」ヲ等分ス而シテ其網ノ高サハ三尺以上四尺以下ナルベク且其棒トノ距リ即チ網ノ長サハ四間半ヲ以テ最モ便宜ノモノトス又網ノ兩側ニ於テ網ヲ離ルル三丈九尺ノ所ニ長サ二丈七尺ノ一線（ベースライン）ヲ引キ、其兩端ヨリ亦一線（側線）ヲ画シ又網ヨリ二丈六尺ノ所ニ横ニ「サルヴイスライン」ヲ画シ而シテ又網ノ中心ヲ通ジテ各「サルピスライン」ニマデー線ヲ引クベシ。即チ左図ニ示スガ如シ（ここにコート^{の図}がある）。各演習者ハ網ノ各側ノ「コート」ヲ充タシ而シテ「サルブ」（「サルブ」トハ第一ニ球ヲ打ち出スコトヲ云フ。而シテ「サルブ」スルトキハ手ヲ以テ球ヲ投ケ其落チ來ル所ヲ打ツベシ）、即チ第一ニ球ヲ打ツ所ノ遊戯者ハ敵方ニテ用意整ハザル間ハ球ヲ打ツコト能ハズ然レドモ敵ガ其球ヲ受ケ又ハ打返サントスルトキハ其「サルヴイス」ヲ正当ノモノト見做スベシ又「サルブ」スルトキニ方^{フタ}リテハ一足ヲ「ベースライン」外ニ置キ而シテ左右交互ノコートヨリ「サルブ」スベシ。「サルブ」スルトキハ其球ハ「サルブ」ヲナセル筋違ナルコートノ「サルヴイスライン」以内ニ落ツル如ク之ヲ打ツベシ。而シテ「サルヴイス」即チ「サルブ」サレタ球ハ必ず第一「バウンド」ニテ之ヲ打返スベシト雖モ其後ノ球ハ飛ナガラ或ハ第一「バウンド」ニテ打返シ得ベシ若シ其「サルブ」サレタ球ニシテ不正ノ「コート」或ハ網ノ前又ハ「サルヴイスライン」以外ニ落チタルトキハ之ヲ「フォルト」（過失）ト稱シ再ビ同「コート」ヨリ「サルブ」セシムベシ。然レドモ敵方ニテ已ニ其球ヲ取り又ハ打返サントセシトキハ其ノ「サルヴイス」ヲ正当ノモノトス故ニ其評点法ハ敵ガ「サルヴイス」又ハ其後ノ球ヲ返シ得ザルトキ又ハ球ヲ「コート」ノ外ニ打ち出スコトキハ一点ヲ得ルモノトス而シテ「サルブ」スル演習者ガ引続キテ二個ノ「フォルト」ヲナセシトキ或ハ遊戯中ノ球ヲ打返シ得ザルトキハ敵ニ一点ヲ得セシムモノトス。又

熟レノ演習者ニテモ遊戯中ノ球ヲ手或ハ体ノ或部分ニ触レシムルトキ或ハ球ヲ二回打ツトキハ一点ヲ失フモノトス。

又四人ニテ之ヲ演習スルトキハ甲乙ヲ一組トシ丙丁ノ二人ヲ一組トス。今仮リニ甲乙一組ヨリ遊戯ヲ始ムルモノトシ即チ甲ハ(1)ヨリ(5)ニ「サルブ」スベシ而シテ第二回ニハ(2)ヨリ(6)ニ「サルブ」ヲナシ斯ノ如クシテ「ゲーム」ノ結局ニ至ルマデ交互ノ「コート」ヨリ「サルブ」スベシ。次ニ丙ハ(3)ヨリ(7)ニ「サルブ」シ次ニ乙、次ニ丁ト順次ニサルブヲナスベシ。

一「ゲーム」(勝負)ノ点数ハ演習者ノ随意ニ定ムルモノトス今仮リニ四点ヲ以テ定點トシ遊戯スルモノトスルトキハ第一ニ其定點ニ達シタル者ヲ勝利即チ「ゲーム」トス。然レドモ双方三点ニ至リタルトキ之ヲ「ジユース」(一様)ト云フ「ジユース」ヲ得ンニハ「バンテージ」(利益)ト称スルモノヲ加フル故統ヒテ二点ヲ得ザレバ「ゲーム」(勝利)ヲ得ルコト能ハズ即チ双方四点ナルトキ又ハ之ヲ「ジユース」ト云ヒ「ジユース」トナリタルトキハ常ニ引続キテ二点ヲ得ザレバ「ゲーム」トナルコトヲ得ズ而シテ通常六「ゲーム」ヲ以テ「セット」トナスト雖モ實際ニ由リテ演習者適宜ニ之ヲ定ムベシ。尤モ「ゲーム」トナルモノハ常ニ敵ヨリ二点ノ超過ヲ得ザル可ラス故ニ其定點ヲ四点トスルトキハ敵ノ三点ヲ得ル前ニ四点ヲ得ザル可ラズ。サレバ「ゲーム」ハ勝敗ノ一段落ニシテ「セット」ハ其定マリタル「コート」ニ居ラザル可ラズト雖其後ハ各自ノ適意ノ所ニ位置ヲ占ムベシ而シテ「サルブ」ヲナスハ右ヨリ始メ交互ノ「コート」ヨリスルモノトス。但シーノ「フォルト」ヲナシタルトキハ同「コート」ヨリ「サルブ」スベシト雖モ二度続キテ「フォルト」ヲナシタルトキハ他ノ「コート」ヨリ「サルブ」スルモノトス(二度続キテ「フォルト」ヲナシタルトキハ敵ニ一個ノ得點ヲ得セシム)。

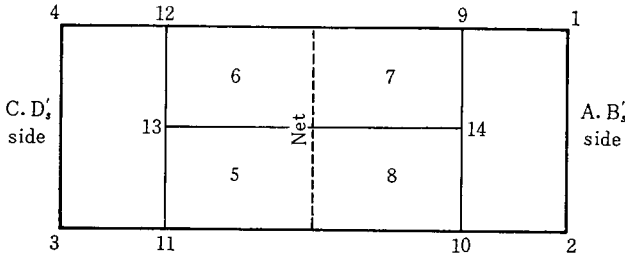
坪井、田中著の戸外遊戯法より、一年半以上も前の明治16年6月11日にF. W. Strange氏(東京大学予備門御雇教師、イギリス人)は「Outdoor Games」という55頁の小冊子を英文で出版し、日本の若い学生に戸外スポーツの必要性和各スポーツの解説をしている。この

なかの第 15 章に Lawn Tennis なる説明文があるので以下これをそのまま載せてみよう。

LAWN-TENNIS

Of all games, Lawn-Tennis is the best. It can be played at any time, provided the ground be dry. It is played on a court marked out with chalk.

The following is a plan of a court.



Lawn Tennis is played by two players or four players. Supposing A and B play against D and C. A commences the game by serving from 1 into 5. If the ball falls anywhere but into 5, the serve is called a "fault". He may then serve another ball from 1. He then goes to position 2, and afterwards to 1 and on, between 1 and 2 until the game is finished. C next serves from 3 into 7, and then from 4 into 8 and so on till that game is finished. B then serves from 1 into 5 and then from 2 into 6; that game being finished D serves from 3 into 7, and then from 4 into 8 and so on. Six games first won by either side decide the Victory, and these six games are called a 'Set.'

The following are the Rules.

1. The players shall stand on opposite sides of the net; the player who first delivers the ball shall be called the server, the other the striker-out.

2. At the end of the first game, the striker out shall become server, and the server shall become striker out; and so on alternately in the subsequent games of the set.
3. The server shall stand with one foot beyond the base line, and with the other foot within or upon the base line, and shall deliver the service from the right and left courts, beginning from the right.
4. The ball served must drop within the service-line, half-court line, and side line of the court which is diagonally opposite to that from which it was served, or upon any such line.
5. It is a fault if the service be delivered from the wrong court, or if the server do not stand as directed in Rule 3, or if the ball served drop in the net or beyond the service line, or if it drop out of court or in the wrong court.
6. A fault may not be taken.
7. After a fault, the server shall serve again from the same court from which he served that fault, unless it was a fault because served the wrong court.
8. The service may not be volleyed, i. e., taken before it touches the ground.
9. The server wins a stroke, if the striker out fails to return the service or the ball in-play, or returns the service or ball in-play so that it drops out-side any of the lines which bound his opponent's court.
10. On either player winning his first stroke, the score is called 1 for that player; on either player winning his second stroke, the score is called 2 for that player; on either player winning his third stroke, the score is called 3 for that player; and the fourth stroke won by either player is scored game

for that player; except as below: —

If both players have won three strokes, the score is called “even”: and the next stroke won by either player is scored “advantage” for that player. If the same player win the next stroke, he wins the game; if he lost the next stroke, the score is again called even; and so on until either player wins the two strokes immediately following the score of even, when the game is scored for that player.

11. The player who first wins six games wins a Set.

Explanation of the Court

1 to 4, and 2 to 3 are called side lines.

1 to 2, and 3 to 4 are called base lines.

9 to 10, and 11 to 12 are called service lines.

13 to 14 is called the half court line.

From 12 to 15, 15 to 9, 11 to 16, 16 to 10 are 21 feet each.

From 4 to 12, 9 to 1, 3 to 11, 10 to 2 are 18 feet each.

From 1 to 2 and 3 to 4, 27 feet each.

The net shall be 3 feet in height.

軽井沢テニスのはじまりと経過

在留外人が夏季の避暑地として、軽井沢を利用しはじめたのは明治19年(1886)頃からであるが、テニスが軽井沢で行なわれるようになったのは明治中期頃と思われる。福田雅之助氏の「テニス・硬式」に、「明治二十五、六年頃に軽井沢でテニス・トーナメントがすでに行われていた。それは大体外人宣教師がテニスを楽しんだ延長で夏期に行なわれた。夏期会員に、硬球の経験のある高木舜三を筆頭に松平慶民、黒田長和、竹尾春光、足立鉄之助らが、日本人として外人の仲間に入ってテニスをしたのが最初であるという」とある。

軽井沢が、はじめ在留外人の避暑地として利用され、おいおい富裕、有閑階級の日本人も入り込むようになり、ゴルフなどが知られなかった当時は、テニスが好適なスポーツとして、この方面に興味をもつ人の娯楽、社交的意義で行なわれ、それが現在にも続いている。

雑誌「ローンテニス」の昭和5年新年号に足立鉄之助氏は、明治25～6年頃の軽井沢のテニスについて次のように書いている。

“外国人は申すまでもなくその国民性・宗教等が異なるが故に、チャーチと運動器具を建設する事は決して忘れぬ。即ち健康に深き注意を払う事が人生の幸福を致す原因なりとの信念は常に習慣的になつて居り、現在のチャーチ寄りの場所に当時二つのコートがありました。これ以外には峠の麓セール氏の別荘にプライベートのコートがありしのみで、現在多くのコートのある所は元小高い堤であつたと記憶しています。又日曜日は宗教の関係上コートは閉されるので、吾人には不便に思ひますが外人宗教団体の関係せるものなれば已むなき事であり、又強て反対しなくとも良い程度と思ひます。

此のパブリックコートの利用に就ては元々宗教家の集りによりて組織されし夏季丈の倶楽部なれば、委員なども外人のみで今日の如く日本人の委員はなく、寧ろ日本人の入会を欲せぬ態がありまして、内心甚だ不快の念にかられました。入会金といふのはなく、一夏一円で会員になれたのです。而して八月中頃にトーナメントが行はれましたが、今日のやうにカップなどはなく、只記録位に止まつて居りました。筆者は毎日見物するばかりで心中大に仲間入りの希望は有して居つたのですが、ジュニアになると英語が十分でなく、その上技倆も上手でないので尻込みして居りましたが、ある夏硬球に経験のある高木舜三君、松平慶民子、黒田長和男、竹尾春光子、西尾子等と共に入会したのであります。これが日本人として軽井沢にて外人仲間に入つてテニスを試みた初めと存じます。

さて、大いに勇んで宿望が達したので朝からコートに出掛けました。外人は夫々用事もあると見えて来ぬので、吾等の独舞台で得意になつて居ますが正午前にはぼつぼつ来る。午後から夕方にかけて一番多く集り、一組で永くコートを占有する事は各自で慎んで居りますが、婦人の組のうるさい事は日本も同様で、多少加減してプレーしなければなりません。兎に角外人と邦人とはそのプレー振りが異り、二度目のサービスも強打するのみならず前進してボレーを試みるなど、スピー

ドから何から馴れるまでは仲々大変でした。

毎夏行はれる試合となつて高木君は独りとび抜けて上手でAクラス、その他私等は何れもBクラス、所が一日一日と試合が進んで遂に高木君はAクラス、筆者はBクラスのチャンピオンとなりました。一同は我々のために君ヶ代を歌つて万歳を唱えてくれ、茶菓を運び、握手を求むるなど満更悪い気持は致しませんでした”と。

針重敬喜氏は、その著書で、“当時の軽井沢は全くの寒村で米国の宣教師 140~150 人が避暑に来る位のものであつたが、この地が次第に富豪連の避暑地となり、外人の数を加うると共に又邦人も非常に速度で増して行き、遂に現今の如く全く都会に等しき避暑地となつたのであるが、之れと共に夏季におけるトーナメントもコートの数と共に次第に量と数を増して行き、日本人の参加も多くなり殊に一般に硬球が盛んになつた割合に、トーナメントの少なかつた時代なので我が有数の選手も出場し、福田、荻野、原田、安部、青木、布井、佐藤等の錚々たるプレーヤーもこのトーナメントに参加して優勝するなど、初めは外人丈けのものであり、又外人がよく優勝して居つたが、遂に邦人が勢力を占めて何時も選手権を得るような形勢となつてしまつた。只この軽井沢のテニスは真に暑中丈けのテニスで、一部の邦人に幸した事は勿論であるが、只長くやつて来たといふ丈けで直接我がテニスへの影響といふ点では、それ程重要なものではない¹¹⁾。”と述べてゐる。

大体以上で軽井沢の夏季における硬式テニスのはじまりと経過、そして現在までそのまま受けつがれている状態を知ることができよう。

日本におけるテニス対抗戦の始まり、——まず高師対高商——

東京高等師範学校に植えつけられたテニスは、前述のように明治23年からは、日本独特の軟式テニスとなつて、特に規則もなく、選手とか試合とかもなく、コートは木を埋めたり、棕櫚繩を張ったりして78呎×36呎という外来硬式そのままの寸法で、お互いに打ち会って楽しむ程度に行なわれていた。当時の東京高師はお茶の水にあり、橋一つ越せば当時の東京商業学校（現一橋大学の前身）が神田一ツ橋に

あった。高師の附属中学からは高商へ進学する者も毎年何人かあった。こんな関係から、高師で行なわれていたテニスは明治 20 年¹²⁾頃から 29 年¹³⁾頃の間だにだんだん高商の方にも行なわれるようになり、いつしか対抗的な意識が芽生えるようになった。(一高対高商のボートレースはすでに明治 22 年にその第 1 回が開かれ、それ以前に明治 20 年 4 月には、東大の第 1 回競漕大会に招かれて高師と高商はボートレースをしたことがあった)。そこで明治 31 年両校の間に話がまとまり、日本最初のテニス対校試合が 11 月に開かれ、双方 7 組ずつの選手を出して 5 回ゲームで試合し、高師が段違いの差で楽勝した。翌 32 年 3 月第 2 回が行なわれたが、この時は高商側に優秀選手が多く特に高師附属中から入った高木舜三のアメリカ式サーブが群を抜き、高師の選手は手が出なかったという有名な話が残っている。以後高商は 4 連勝を続けた。

日本のテニスの試合はまずこの高師対高商戦に刺激され、以来各学校に伝播されて行った。そしてまだスポーツ種目が少なかった(当時までの外来スポーツはボート、野球、テニス、陸上競技、フットボール、ホッケー、スケートなどで試合が行なわれたのは前 4 者くらいであった)ために、選手間の対抗意識のほかに全学生を挙げての応援の白熱戦があり、舌戦口角泡を飛ばす弥次の応酬がなかなか面白かったという記録が残っている。

その後この両校の対校試合は、定期戦となり、長く続き、他大学にも影響を与え、学習院、慶応義塾、早稲田の各校に伝播し、明治 35 年 5 月 18 日には、高師主催の下に、東都 12 校を招待した連合庭球大会が開かれ、東京高師、高商、帝大、農大、慶応、東京専門(後の早稲田)、台湾協会(後の拓大)、学習院、高工、美術、外語、高師付属中などが参加し、紅白に分れて試合を楽しんだ。その頃の服装は、メリヤスのシャツ、黒ズボン、または和服の裾をはしょった姿に、素足または足袋ハダシ、腰に手拭をぶら下げるといった者もあったという。

明治 36 年から、高師対高商戦に、早稲田、慶応も加わり、4 校対校戦が行なわれるようになり、大正 2 年に慶応は 4 校リーグから分離

して、硬式庭球に移った。その後3校リーグは春秋2回舉行され、新聞も紙面をさいてこれを報じ、全国ファンの関心を集め、テニスの普及発展に貢献した。大正9年に入るや都下の諸大学は相次いで硬式庭球部を創立する状勢となり、歴史的な3校リーグも発展的解消を見るに至った。

明治35年東京高等師範はテニス界にもう一つの貢献をした。それは今日の巡回コーチの性質を帯びた地方への遠征旅行で、京都帝大、神戸高商、御影師範などの関西勢に一つの警鐘を与えて、普及へのきっかけをつくったことであった。この結果関西地方のテニスは急速に進展を見せたのである。

当時の試合方法で、今日と異なる点を挙げてみると、……。

サーバーはサービスするとき、相手に注意を促す意味で自ら「プレー」と唱えたことである。これはフランスのJeu de paume時代に「Tenez!」と叫んだのと全く同じである。そして、紳士的なテニス・マナーの本来のサービス精神を表したもので、現在の如く敵の意表を衝くという攻撃的なものと全く違っていて、サービスは第1球を相手に提供するという意味から生じた言葉から考えると、当然なことでは甚だのんびりした球戯（球技ではなく）という発生に由来したものであろう。また得点の計算は失点を数えて行くという形で、最初サーバー側がエラーをすれば、ゼロ・ワンといわずに、ワン・ゼロとカウントしたものであった。技術の程度も甚だ低く、敵、味方の前後衛とも、コートの後陣に位置し、互に緩球を打ち続けて、相手のエラーを待つという戦法で、強い球で相手を急襲するという攻撃戦法はとらなかった。明治37年頃から東京高商の金原選手が、機を見て後陣より前進し、スマッシュを打って前衛技術の端緒を見せるようになり、また同校の高木選手が外人から学んだ硬球式の猛烈な「アメリカン・ツイスト・サービス」の妙技を見せるようになり、テニス技術も次第に発達するようになった。

明治37年には、高師、高商、慶応、早稲田の4校の委員が高師に集まり、協議の結果、軟式庭球の規則らしきものを作った。これが日

本における庭球規則の最初のものである。

東京高等師範学校のテニス

東京高等師範は明治5年(1872)5月29日の創立で、校舎は湯島旧昌平殿の建物が充てられた¹⁴⁾とあるから、今年でちょうど100周年を迎えたことになる。最初は単に師範学校と称し、明治6年8月から東京師範学校となり、19年4月から高等師範学校と改め、35年3月から広島にも同種の学校ができたので東京高等師範学校となり、昭和25年東京教育大学となるまでの長い間この名称が用いられ、教育の大本山とされてきた。

テニスが正式に日本に紹介されたのは、前述の如く、体操伝習所のアメリカ人教師リーランドによってであり、この体操伝習所は明治11年文部省布達をもって、神田一ッ橋に設置され、体育教師養成機関で、18年には東京師範学校の附属となり、19年4月には高師の体操専修科となって発展的に廃止された。このようなわけで、テニスの開始は高等師範であるといえるのである。

アメリカ人リーランドが体操伝習所の教師として招聘された際、当時仙台英語学校に在職していた坪井玄道が、通訳として招かれ、リーランドを助けていたが、14年7月リーランドが任務を果たして帰国した後、坪井はもっぱら体操術の指導に当たり、15年6月には「新体操書」を著わし、18年2月には、田中盛業との共著として「戸外遊戯法」を出した。そして多くの外来スポーツを紹介したのである。

東京文理科大学、東京高等師範出版の「創立六十年」には、この間の事情を、

「テニスは、明治11年頃米人リーランドが始めて、我が国にもたらしたと言はれるが、本校では、16,7年頃坪井舎監の指導により、既にラケットを備へ、コートが設けられ、生徒一般にかなり上達を示すやうになつた。この外、ベースボール、弓術、撃剣も器具を備へて有志の使用に委した。しかしその技能は到底今日とは比較すべくもなく、テニスが漸く体をなして居たに過ぎなかつた。」¹⁵⁾と伝えている。

明治 23 年、東京高師は、三田土ゴム会社に委属して、軟球ゴム球を造らせ、日本独特の軟球テニスが正式に始められたが、29 年頃には、「テニスは、この頃校技と称せらるる程盛んで、全生徒殆んどラケットを手にしその費用も運動会（校友会の如きもの）が全経費の三分の一以上を支出した。当時一橋の高等商業学校にても本校と相並んでテニスが盛んであつたが 31 年 11 月始めて同校と対校試合を行い、その後之を毎年の恒例となした。第一回試合に出場して活躍した選手は、石井国次（後に学習院教授となる）、関本幸太郎、今村孝次等であつた。五番勝負、二組抜優退等の規則も当時定めたもので、32 年高橋清一は“実験ローンテニス術”を著し、この技を普及するに努力した。」¹⁶⁾ということである。東京高師は明治 29 年 3 月運動会なる組織を作り、当初は、柔道部、撃剣銃槍部、弓技部、器機体操および相撲部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部の 7 部を設け、生徒はその 1 部または数部に入って毎日 30 分以上必ず所属部の運動をなすこととし、生徒は毎月 5 銭、職員は月給の百五十分の一を会費として納めることを定めた。

テニスは当時、高師と東京高商との専有物の観があつたが、だんだん他の学校にも普及し、35 年 5 月には都下の 10 余校を招待し、テニス連合競技を開催した。高師ではコートも、はじめは 2 面だけだったが、35 年末には大塚、お茶の水、永楽町の 3 寄宿にあるコートと計 7 面になり高師庭球部としては「ローンテニス」という小冊子を出して、テニスの普及発展に努力した。

36 年頃から、高師、東京高商のほか新しく早稲田、慶応義塾の両大学が抬頭し、4 校対立で覇を争うようになり、世間の注目を浴びるようになった。

大正 3 年 11 月には、早稲田と高商と協力して、全国中等学校庭球大会を開くことになり、かつ諸学校間の対校試合は、その後大正 9 年の硬球の採用まで長く行なわれていた。特に高師対高商の試合は歴史的意味が深いだけにその応援も熱烈であつた。

高師テニス部の優秀選手には 36, 7 年頃に飯河道雄、安藤基平、浮

田辰平などが輩出し、大正9年軟球になってからは、太田芳郎、古賀吉造、白髭丈雄、それより少し遅れて森勝礼などの選手があった。なかでも太田選手は大正13年(1924年)のオリンピック・パリ大会に選ばれたが、不幸にも途中病を起し、空しく香港に留らざるを得なかった。しかし氏は卒業後ヨーロッパ諸国に旅し、デビス・カップ試合には日本を代表して出場し、またイギリスその他のヨーロッパ諸国のテニス大会にも出場してたびたび優勝し、世界的に名声を博した。

大正14年秋には、一時廃止されていた東京商大との歴史的対校試合を復活し、毎年秋これを実施することとなった。

以上が、日本テニスの導入からその後の普及発展に貢献した東京高等師範のテニスと、当時交際のあった高商や他校との関係である。最近私立大学のマンモス化と国公立大学の入学難、一部私立大学スポーツのセミプロ化などから、国公立大のスポーツは影をうすめたかの観があるが、東京高師、東京・神戸両高商などのテニス界に果たして来た割合は見逃すことができない。

東京高等商業(一橋大学)のテニス

東京高商のテニスの歴史は高師に次いで古く、明治20年の頃から野球と共に一部学生の間で行なわれていたが¹⁷⁾、その頃は硬式であった。やがて軟式となり、これに興味を持つものはあまりなく、ごく少数の有志の間で行なわれていたに過ぎなかった。その後29年頃までは大した普及はなく、31年の11月東京高師との相談がまとまり¹⁸⁾、日本ではじめてテニスの対校試合が行なわれたのであった。この高師対高商戦については、「日本におけるテニス対校戦の始まり」の篇に詳述してあるのでここでは省略する。

東京高商のテニス部がいつ頃部として発足したかは記録が見当たらない¹⁹⁾。「一橋専門部委員養成所史」の庭球部の項²⁰⁾(p. 285)に「ボート部と相並んで一橋最古の歴史を誇る我が庭球部の創設は遠く明治20年に遡る。爾来、明治30年に至る迄は左程普及は見なかつたが、30年以降隆盛を極め、強敵たる高師、慶応、早稲田を軍門に下し、都下に覇を唱え、同39年には関西庭球界の覇者神戸高商の挑戦に応

じ之を撃破した。」とある。しかしこの「一橋庭球部創設は明治 20 年に遡る」という記録は、何を根拠にしたものか明瞭でなく、庭球部にも、一橋大図書館にもこのことに関する古い記録は見当たらない。一橋の端艇部はすでに明治 18 年に存在していたことは明らかである²¹⁾が、テニス部の創立については明確なものがなく、信頼できる古い記録としては、一橋五十年史の「運動に関しては明治 18 年以後学課中に体操の一科が設けられ——外国語学校附属の高等商業には既に体操があつた——兵式体操を課して学校が体育に意を用ふる様になると共に学生の間にも運動熱が盛んに起つて来た。水泳のみは既に木挽町時代から大川を利用して行われて居たが、合併後（明治 18 年後）先づ盛んに興つたのはボートであつた。次いで各種の陸上運動殊にテニス、野球等が始められたが未だ一部に限られ、一般に興味の中心となつたのはボートのみであつた²²⁾。」という文章で、これによると明治 20 年頃、一部の学生がテニスを手がけたことは確かであるから、20 年を部の創設と書いたものらしい。さらに同五十年史の、明治 30 年以前の記事に「運動方面に於てはボート依然として中心をなし、テニスも此頃に到つて漸く行ふ者多きを占め、都下明治学院、青山学院の様な宗教学校を除いては余り行はれぬ内にもボールの強い事を以て聞えるに到つた²³⁾。」とあるから、テニスでは早くから都下でも名を挙げていたことがわかる。

明治 35 年 11 月全校団結の統一体として「一橋会」（ヒトツバシカイと読む）が創立され、当時は端艇部を主として、庭球、柔道、剣道、弓道部の 4 部が従の形をなした運動会があつたが、これが一橋会の傘下に他の文芸部と共に統轄されることになった。（この時、「一橋会員は総て端艇部員たる事」という条項があつた）。一橋会テニス部の初代部長は志田鈿太郎教授であつたが、それ以前のことは明らかでない。

明治 35 年 5 月の国民新聞に、“高商の第二回ローンテニス大会が行はれ、帝大、高師、外語、慶応等各学校の来賓競技があつた”ということを経ているし、その年の 10 月同新聞に“高商のコートで対高師戦第七回大会が行はれ、第二回以来常に高商の勝利に帰してゐる

が、斯界に名ある二校の試合で見物人数千名、高商は優退組四組を残して又勝つた”と記されている。このことより察して、明治 32 年ボートの対校レース禁止に対する鬱憤のハケ口として、33~4 年頃より盛んに練習もやり、対校試合も行ない、当時は高師と共に庭球の両雄として有名であった。

一橋会庭球部は、明治 36 年の春、大会を行ない、秋には高師、慶応を破り、37 年 4 月には、高等商業学校で新設のコート開きを兼ねて、各学校連合庭球大会を開き、この日最後の高師対高商の試合は「兩大関の決勝」といわれたほどであったが、「遂に高商が勝つた」と時事新報は報じている。またこのシーズンには早、慶をも破って大いに母校の名を高からしめた。この 4 校戦は毎年春秋 2 回行なわれ、大正 2 年慶応が硬球に転ずるまで続いた。明治 44 年の秋には他校全部を破るという大業を果たしている。慶応が硬式に移って 4 校から脱した後は、早、師、商の三巴戦となり、大正年代における斯界注目の年中行事となった。明治 39 年、関西の覇者として君臨していた神戸高商の挑戦を受けて、第 1 回戦に勝ち爾来対神戸戦は毎年の行事となり、両者が硬式になって後も続けられた。大正 9 年 3 校（高師、早大、神高商）制覇をなしとげた東京高商は、その年の夏、鮮満遠征より帰って²⁴⁾、慎重審議を重ねた結果硬球採用を決定した。すなわち学校当局の誠意なきに憤慨した庭球部は自ら蒲田に 500 坪有余のコート敷地を得て、直ちに工事を急がせ遂に 9 月 17 日ダブルス 2 面を竣工し、9 月 26 日硬式採用の記念を兼ね盛大なる新設コート開きを挙行了²⁵⁾。慶応に次いだこの決定は、高師、早大その他を刺激、同調させ、続々と硬式採用に傾いた。したがって日本における真の意味の国際的庭球史は実にこの年から始まったということになる。

全世界注目のデ杯戦の第 1 回は、1900 年（明治 33 年）で、ちょうど一橋のテニスが盛んになりかけた頃であったが、大正 10 年（1921）日本が初めて参加した時、日本代表に選ばれ、アメリカ代表チルデンと熱戦を演じて世界的话题を賑わし、その後も国際的選手として活躍した清水善造氏は高商の軟球時代の卒業（明治 45 年卒）であり、こ

れと共に故柏尾誠一選手（大正2年卒）、故岡本忠雄選手（大正6年卒）等いずれもデ杯戦その他の世界的庭球大会に出場活躍した人達であり、明治末から大正初期にかけて高商のコートで鍛えた人々であった。

また大正10年の極東選手権競技会（第5回上海大会）には浅野弓夫（大正10年卒）・北川豊（大正11年卒）組が出場し、翌11年にはアメリカより来朝したカリフォルニア大学のペーツ主将以下4名を迎え撃った。

昭和3年の第7回全日本選手権大会には、シングルスで牧野元（昭和4年卒）選手が優勝し、一橋庭球部の名を再び斯界にとどろかした。

一橋が主として行なった定期戦としては、関東大学専門学校選手権大会、全国高専大会、対帝大戦、対文理大戦、対神戸商大戦、対東京外語戦、対一高戦、対横浜高商戦などであり、なかでも対一高戦はもっとも力を入れたもので、この試合には清水善造氏の寄贈による清水カップが賭けられていた。

とにかく、一橋は高師と共に日本テニスの開祖といっても過言ではない。

早稲田のテニスと安部磯雄

早稲田の庭球部創設は明治36年10月²⁶⁾であるが、これについては初期の部長をつとめた安部磯雄氏の手記が貴重な資料となっているので以下、木村毅氏の「日本スポーツ文化史」から引用しておく。

安部氏が明治24年渡米して、ハートフォード（Hartford、コネティカット州の主都）の神学校に入学した当時、ここは学生40人たらずの神学校で、テニス・コートが二つあって、安部氏にテニスの興味を覚えさせた。「予は如何にして社会主義者となりしか」という自叙伝のなかに、

「春や秋の如き運動の好季節においては、学生のほとんど全部が毎日一時間ないし二時間、庭球のために費すことになつていた。神学校には唯二つのテニスコートがあるのみで、他に何等運動設備はなかつた。しかし僅か40人位の学生であるから、午後の時間を学

生全部に割りあてれば二個のコートでも兎に角間に合うたのである。米国のことであるから、庭球といえれば必ず硬球を用いることになつていた。私も入学当時から庭球をやり、後には大なる興味を感じずるようになった。三年間を通じて庭球のために全力をそそいだのであるから卒業まぎわには 40 人中で第三位を占めることになつた」と。また同氏の「青年と理想」という著書の「スポーツを語る」という章には、

「私は卒業前にはハートフォードのベスト・ファイブの腕前になることができた。その後東京へ帰つて明治三十三年、三十五歳の時、今の早大の前身たる東京専門学校へ来たが、その当時学校のスポーツとしては、柔道、剣道、弓道の日本古来のスポーツだけで私が早大へ来て初めて、学校としてテニスをやりだした。

当時は未だ各スポーツに単独の部長があるのでなく、学校の運動部長が又各部長を兼任していたものであるが、その運動部長に私になつた。その後三十四年に野球部が創立され、自然わたしがその方にも関係するようになった。当時のテニスはもちろん軟球であつたが、私はアメリカでやつた硬球から軟式にうつるので雑作なく、暇のある度にコートへ出では学生と一しよにやつたものだつた。当時選手だつた連中でいまいる人は橋戸君、河野君などであるが、私はまだその頃には、中でも一番強い学生と対等に試合ができた。一度学生組で一番強かつた三上、井上（これは共に有名な選手）組と私と当時野球部の選手であつた橋戸君と組んで試合したことがあつたが、その時も何しろこつちが口の悪い者二人がそろつていのであるから問題なく勝つたほどであつた。橋戸君は野球部選手であつたがテニスもやり、その当時、野球の選手では一番つよかつた。その後もひきつづきテニスをやつていたが、五十歳の時リョウマチスで医者から運動を禁じられてやめてしまった。しかし民雄、道雄の子供連が中学でテニスを始めたのは、まだ私がテニスをやめない前であつたため、夏休みの度に一家そろつて軽井沢へ行き、そこのコートでよく親子試合をやつたが、結果はもちろん問題なく私の方が

勝つていた。民雄はその後もずっと早大でテニスをやつていたため、テニスでは先ず成功したと思つている」。(安部民雄は昭和2年全日本庭球選手権大会で、シングルスおよびダブルス…福田雅之助と組み…で優勝している。)

さらにこの間の事情を伝えているものとしては、針重敬喜著の「テニスの人々」がある。その第六章「安部磯雄先生のテニス」の部を引用させてもらうと、

「明治 37 年頃よりテニスの覇権は新興の私立大学、早稲田と慶応の両校に移つて行つた。これは私立という自由な立場から入学する者の自由もあつたし、又テニスする時間の自由もあつたので、そこに自然と新しいテニス国が樹立せられたのである。早慶の両大学がその頃からテニスばかりではなく、野球に柔道に弓道によくその羽翼を延ばして来たのであつたが、それには何と云つても大黒柱、支柱が無ければならない。その人は我が運動界の恩人安部磯雄先生である。安部先生は早稲田庭球部、野球部の創設者であり恩人である外、日本運動界の先覚者でもある。私は先生についてここに特筆大書してその功をたたえなければならぬ。

明治 36 年、私が(針重氏)早稲田に入つた時は、先生はもうその教授として教壇に立つて居られた。早稲田に来られる以前は牧師をされたり、出身校の京都同志社の教師を勤められたり、それから渡米して暫く、米国の大学に、それから欧州にも永く滞在せられたのであつたが、帰朝後大隈侯の嘱望により、早稲田の先生になられたのである。私は坪内逍遙博士、島村抱月先生、ラフカディオハーンの講義は聴き洩らしたことはなかったが、他の講義は余り出席せず、友達のノートを借りて間に合わし、その間にテニスをやつていた。そこで庭球部長の安部先生の知遇を得たのであつた。

安部先生は早稲田の野球部長で庭球部長を兼ねて居られたが、野球の練習が始まる前後、必ずテニスコートに来て自らラケットを握られた。黒ズボンに白の兵児帯、白の運動帽を被つて、背は低いがガツツリした体格でフォア・ハンドは特に上手であつた。畜生ッ畜生ッと

掛声しながら、選手と一緒に練習もし試合もして喜んで居られた。私が経営して居つたローン・テニスに昭和 15 年 1 月、私の話を書かれ寄稿せられたものには次のような一文が載せられて居つた²⁷⁾。

庭球の憶出

安部磯雄

私が米国の学校で勉強したのは、明治 24 年から 27 年までで、私の学校はポストンとニューヨークの中間にある、人口 5~6 万位の小都市ハートフォード市にあつた。私は三年間そこに滞在して居たけれども、曾て野球試合というものを見た事がなかつた。学生の口から少しも野球の評判を聴かなかつたのであるから、その当時ハートフォードには三流どころの野球団さえなかつたのであろう。然し私共の学校には二つのテニスコートがあつて、可なり多く利用されて居たようだ。私は専ら散歩を以て健康法として居つたのであるが、後にはテニスの仲間入りをなし遂に大なる趣味を感じることになった。言うまでもなく、米国のテニスは硬球を用いるのであるから、私は最初からこれに習慣づけられて居たので、帰朝の後初めて軟式を用いた時には勝手が違つてまごついた。

早稲田の教師になつた頃(明治 32 年 5 月早稲田に赴任)には野球と云うものもまだ人々に顧みられて居なかつたが、庭球は殆んど有るか無きかの有様であつて、大学(東京専門学校—早大の前身—)には柔道と剣道の道場の外に、貧弱ながら弓場があつたのみで、近くの早稲田中学には幸にテニスコートが一つあつたから、私も時々出かけて練習試合をやつたものだ。然し、当時のテニスは実に幼稚なもので、専門学校や中学校を通じて私に敵するものは一人もなかつたようだ。

私が自ら庭球と可なり親しき関係を有しながら、遂に野球の方に転向したということについては、概略その理由を述べて置かねばならぬ。私が明治 27 年の夏米国留学を終えて独逸に赴く途中、英国を訪問する事になり、7 月 12 日、ロンドンに到着して、翌日の新聞を見ると、前日オックスフォード大学運動場において、米国のエール大学対オックスフォード大学の陸上競技が行はれ、その結果オックスフォードが大勝利を得たという記事があるではないか。私はこれを読んで大いに

感奮したのみでなく、何時かは自らもこれを実現すべしと決心した。私が早稲田の教師となつてから、主として野球部のために努力したのはこれがためであつた。

然し私の考えていた希望に大隈総長の如き後援者がなくては決して達せられるべきものではない。第一回の米国遠征には財政的にも可なりの欠損を生じたけれども、その後の野球部はこの点において何等の心配がないようになつて、私は往時を追想して実に愉快地堪えない。

私は今更野球と庭球の比較論を試みる考えはないが、概して言えば、単に娯楽と云う立場から見ると、庭球の方が野球に優つて居るのではあるまいか。見物人の立場から言えばもちろん野球の方が遙かに面白いと思われるけれど、選手が練習する場合には野球よりも庭球の方が面白いのではあるまいか。早大野球部の創立時代においては度々鎌倉師範の運動場や、伊豆伊東の小学校の運動場で冬季練習を行つたのであるが、休息中若しくは練習後において選手が盛んにテニスの練習をやつた事を記憶して居る。だから、練習は庭球の方が面白く、試合は野球の方が面白いという結論になるのではないかと考える。

当時からよく歌われた早大テニス部歌は針重敬喜の作詩で次の如きものだつた。

天地の精気人の和を	春は早稲田の岡辺に
秋は戸塚の夕影に	萃めてなれるテニス団
一度鉄腕振う時	勇める敵の影もなし
再び立たば王冠は	己が頭上に輝けり
全勝の栄今茲に	芙蓉の峰の朝ぼらけ
光照らさぬ隅もなし	見よや早稲田のテニス団

日本の硬式テニス

明治の初年頃、日本で行なわれたテニスは、もちろん外国直輸入のものであるから硬式テニスであつた。そして横浜、神戸などの外人宣教師等が時々行なっていたが、僅かの日本人がまねる程度であつた。しかしその後日本ではこの硬式が素直にそのまま育たなかつた。そして明治末まで、日本人のテニスは軟式一色であつた。

大正2年、先進的な慶応義塾が、スポーツの国際状況を逸早く察知英断し、他大学に先きがけて硬式に踏切ったことは大なる英断であった。東京高師、高商、早稲田などが、それより7年もおくれた大正9年以後次ぎ次ぎと硬式を採用したことを見ると、慶応の識見と決断は敬服に値する。しかも慶応は硬式に切換えてから僅か8カ月という短時日の大正2年12月16日に、マニラ遠征のために4人の選手を送ったことは、これまで斯界の先覚者としての面目躍如たるものがある。

海外に出て、テニス界の状況を見た者は誰でも、早く日本も硬式を採用すべきだという考えをいだいたらしい。たとえば早大出身の三神八四郎は、アメリカのシカゴにいて、硬式採用を強く感じ、大正元年の冬「武俠世界」という雑誌に次ぎの如き手記を寄せている。

「外国の運動を輸入しながら、外国と試合のできぬのは、テニスばかりである。すべての運動は世界的に発達してきたので、日本のみ軟球を使用することは、世界と技を戦わすには駄目である。ゴム球（軟式）を使用しているのは、恐らく日本位のものであろう。外国では一度ゴム球を使つた後、今のような硬球を使うようになったことを知れば、ゴム球を使う日本が、それにならうことは当然と思う。硬球は高価だからゴム球を代用したので、別にゴム球が興味があるとか、他に理由があるのではない。いずれにしても、我が国庭球の過去を顧りみ、併せて海外の庭球進歩の跡を探り、世界の大勢の向うところに従えば、近き将来において、我が国が一般的に硬球を使用するようになることは明白である」

と、すでに将来の見通しをたてて、硬球採用を進めている。

また、当時イギリスに留学していた小泉信三（慶応のテニス部員、庭球部長をした）は、1913年のウィンブルドン大会を見て、母校の硬球採用決定を喜ぶという便りを寄せている。小泉氏は洋行前はむしろ硬式採用反対論者であったという。当時は「軟球世界統一論」というのが、新聞や雑誌に書かれていた時だけに、慶応の硬球採用には相当反対非難もあった。このことを現在になって考えて見ると、世評を覚悟の上、独り敢然と硬球を採用した慶応の決断と将来の見通しの自信

には深い敬意を表さずにはいられない。しかし学校庭球が硬式化する以前に、日本に硬式団体が全くなかったわけではない。東京ローンテニス倶楽部が1900年（明治33年）にはすでに創設されていた。これはテニスそのものが本体でなく、元来が内外人の社交機関的な存在で、コート三年町に持ち、倶楽部員だけのトーナメントが行なわれていた。当時、外人選手が日本に寄港した時、他に適当なコートがなかったため、その歓迎試合やエキジビション・マッチなどは、いつもこのコートが使用され、外人の妙技はここでのみ見られるという状態であった。また一方、軽井沢には夏季だけ外人の宣教師が集まるクラブがあって、同好の日本人も時にはそのトーナメントに参加していた。

他方関西では、三神八四郎等の尽力により、大正6年に豊中にコートを設け、大阪ローンテニス倶楽部が結成された。

かくして軟式のみに関ちこもっていた日本のテニスも、硬式化と共に、大正の初中期に熊谷、柏尾、清水、三神等の国際的優秀選手が出現し、マイクリック米国庭球協会長らの強い勧めを受けて、デ杯戦に参加することとなり、大正11年3月11日には日本庭球協会が創立され、初代の会長には朝吹常吉氏が就任した。

日本のような貧乏国が軟式から硬式に移るには、経済的に幾多の困難があった。当時の苦心の一端を記してみよう。ラケットなど軟式用で間に合いそうだと思って使ってみると、ガットがすぐ切れてしまう。強く打てば破れるし、買うにしても、どこの運動具店にもあるというわけには行かず、当時銀座にあった特別な店か、横浜まで出かけて舶来のを求めねばならなかったし、品物も数多くあるわけではないから、急に手に入らぬこともある。ボールは軟式と比較すると大変高価で、入手も思うようではない。学生は東京ローンテニス倶楽部に行って、使い古しのボールを懇願して安く1個1円くらいでかけて貰い、洗濯して汚れを落とし、ワイヤーブラシでこすって毛を立てて使い、最後にはフェルトをはがして裏返して貼りつけてぎりぎりまで使うという状態だったという。こんなわけで、費用は、軟式庭球部時代の4~5倍はどうしてもかかった。現在でも高校、中学などで硬

式があまり行なわれていない原因の主なもの、この経済的理由であろう。

このような状況のなかで、硬球を採用した日本のテニス界からは、清水、柏尾、熊谷、神田、原田、太田等の世界的選手を出して新界を睥睨させたことは、すでに周知の事実である。

軟球と硬球、および軟球内部の混乱

既述の如く、明治初年日本にテニスが導入された当時は、外国（大抵はイギリス、アメリカ）製の硬球を購入して使用していたのであったが、輸入の不便と経済的な理由から、日本独特の軟球が考案され、ごく一部（東京ローンテニス倶楽部、軽井沢の外人クラブなど）を除いては、長い間、すなわち大正2年に慶応が硬式に切りかえ、大正9年にその他の諸大学、高専も硬式テニス部を創立するようになるまでは、各地で、軟式が行なわれていた。

そして、このように各大学などで硬式を用いるようになった後でも、軟式には軟式の長所、特長があり、これを捨てきれない人達によって、軟式はその後も長く続き、今日まで普及発展してきたわけである。

国際的視野に立って、いち速く大正2年に硬式庭球の採用を宣言して、軟式テニスから引退した慶応は、早大にも硬式採用の誘いをかけたが、早大としては予算その他の関係から時機尚早の感があり、まだそこまでは踏切れなかったので、慶応を除いた高師、高商、早大の3校争覇戦は古い伝統をもつ大きい試合として、その後も長く続き、世間の人気を集めていた。

慶応が非常に早く硬球に転じた原因には、もう一つの理由があった。それは、明治39年早慶野球中止事件²⁸⁾の波がテニスにも波及し、恒例の早慶軟式庭球対校戦まで中止せざるを得なくなった。このため慶応は、軟式庭球に対する興味も薄まり、先輩の徳憑もあって硬式化の時機を早めたという見方もある。この間の事情を、福田雅之助氏は、「庭球五十年」なる著書のなか²⁹⁾で、“多年、軟球界の大立物だった慶応が、大正2年とつぜん国際的ボールすなわち「硬球」を使用することを発表して、高師、高商、早稲田の仲間から去ったのは、いっそ

うの淋しさを感じさせた。早稲田としては、たとえ硬球を採用しても、慶応とは試合ができない状態だった。それで軟球に留まったことは、当時の早稲田の山崎選手の話である”、と。

関東の高師、高商、早稲田、慶応に対して関西では、神戸高商、三高、御影師範が盛んで、やや遅れて東大、京大なども参じ、これら各校間の対校試合は明治末から大正にかけて頻繁に行なわれた。この間の試合の状態については、前述「庭球五十年」に、各試合について、各校の選手名を挙げ詳細に勝敗や応援の状態についてまでも述べてある。

大正7年、早稲田は満鉄の招待で、神戸港から遠征に旅立ち、大連、遼陽、撫順、長春、奉天を回り、帰路全朝鮮とも試合して帰った。

大正9年を迎えて、東京高商に待望久しい3校制覇神高商、高師、早大の機が到来した。その余勢をかって高商はその年の夏、満洲遠征を敢行して、帰京すると、硬式採用の声明を公表した。機も熟していたので、東京高師、早大もこれに同調したので、全国の各大学、専門学校も多くも軟式を惜しげもなく捨てて硬式採用を決定した。

しかし前述の如く、軟式のよさを認めている所も多く、東京医専、東洋大学、国学院大、中央大学その他の諸学校のクラブ、実業団などでは依然として軟式にとどまり、大正12年3月には「東京軟球協会」が結成された。そしてさらに13年4月には全国に会員を広めて「日本軟式庭球協会」と改称した。そして、この年から同協会主催のもとに、「東西対抗戦」が行なわれることになり、第3回までの会場として、大阪宝塚コート、東京京華中学校コート、名古屋愛電新舞子コートの各コートが使用された。

大正13年10月25日に、明治神宮競技場が完成し、10月30日から11月3日まで、第1回明治神宮体育大会が、内務省主催によって挙国的体育行事として開催されたが、その競技種目のなかに軟式庭球が入っていなかった。そのため軟式界から不服、激怒もあり一時混乱したが、翌14年からは軟式も加えることになって解決した。そのため競技規則を改めて制定することとなり、この新規則のなかに「ダブルスの際、一組の二人が交互にサービスをする」という硬球流

の規則があったので、軟式庭球をして硬式化せしめる意向が含まれているという非難がでて問題となり、意見が対立した。この神宮ルールに反対したのは「日本軟式協会」側であり、神宮ルールを支持する者は別に「全日本軟式庭球連盟」なるものを大正 15 年 12 月に設立し、この 2 団体はその後昭和 3 年まで全く相対立して、別々に大会などを主催した。特に反目の頂点に達した昭和 2 年には、8 月 27、28 日の両日、一方では「日本軟式協会」主催の選手権大会が戸山学校で举行されているのに、同月同日他方では「全日本軟式庭球連盟」主催の大会が東京帝大コートで行なわれたという不幸な状態にまで進展した。しかしこのような、同一競技に二つの機関が対立しているというはずかしい、不幸な状況を心から憂う人達の尽力、奔走によって、昭和 3 年両団体の協定が成立して、新たに「日本軟式連盟」が創立され、その後数年は小康を保った。しかし昭和 7 年に至るや軟式庭球界には再び混乱の嵐が起こった。

それは、軟式庭球は日本独特のスポーツであるから、硬式庭球の附属物のような処遇を受けることに、断固として反対するというので、「日本軟球連盟」の東京府支部長宮田光雄を会長として、旧競技規則を採用すると宣言し、名称はそのまま「日本軟球連盟」という新団体が結成された。これに対しいわゆる神宮ルールを絶対的に支持する元の「日本軟球連盟」は名称をそのままにして、事ごとに相対立したので、全国の軟球界は同名称の二団体のそれぞれに分れて、全くの混乱状態になってしまった。

その上、その頃（昭和 7 年頃）前述の如く大阪では、鳥山隆夫氏が準硬球という球を考案して使用し、独自の庭球をはじめ、大阪時事新報社を中心として、角一ボールを支持し、混乱の上にさらに三分した形となって、大ゆれにゆれたのであった。しかしこんな混乱が長く続くはずもなく、昭和 7 年秋頃から両連盟の歩みよりが見られ、昭和 8 年 1 月 25 日に、統一団体が組織され、新しく「日本軟球連盟」が再出発し、4 月 2 日に各地代表の評議員を東京に招集し、創立総会を開き、連盟規程その他の決議を行なった。

この規約で、前後衛交互のサービス制は廃止されることになり、さらに翌年2月4日の改正によって「サービスは、その組の前、後衛いづれでも随意であるが、一ゲーム中において交代することはできない」となり、一人のものが、全ゲームのサービスをやっても差支えないことになった。

その後の軟式庭球は全国の各地のみでなく、台湾、朝鮮にまで非常な勢で普及発展した。

準硬式テニス

硬式テニスの技術を高めるには、最初から硬式を練習した方がよいことはいうまでもない。日本のテニス選手は、幼少時代は軟式をやり、高校、大学に進んでから硬式をはじめるとするのが常道である。これでは廻り道であり無駄が多いことになる。日本のテニス史を顧みると、古い頃の国際的大選手はいずれも、こうした道をたどっている。すなわち日本から最初にデ杯戦に参加した（1921年—大正10年）熊谷一弥、清水善造、柏尾誠一郎をはじめとし、その後、昭和8年のデ杯選手佐藤次郎まではすべて、軟式から硬式へ移った人達であった。

この軟式から硬式に入る技術的困難やロスを解消することが、硬式技術進歩の一つの鍵となるということに注目し、これを実行しようとした人があった。

大正の末期（13年頃）から、大阪の鳥山隆夫氏は、中学校（旧制）の年齢頃から硬球を使用できるようにとの意図の下に、フェルトで被覆はしないが、ゴム地を厚くし、重量が硬球程度のものを角一ゴム会社と協力して試作し、これを準硬球と名づけて広く世に広めようとした。大阪毎日新聞社もこれに協力し、全国中等学校選手権大会を開催し、この準硬球を使用することにしたので、関西地方の中等学校はたいていこの準硬球を採用するようになった。そして準硬球で育った人のなかからも何人かのデ杯選手が出現した。このようにして準硬球は一時盛んになったのであったが、そのうちに準硬球独特の打法が行なわれるようになり、これがかえって硬球転向のさまたげになるという批判があって、幾年も経たないうちに廃止されてしまい、全く一時的

の短い運命に終わってしまった。

この準硬球を発案実施した鳥山氏について、もう少し紹介しておく。鳥山隆夫氏は初め慶応に入学し、見事なテニス振りを発揮していたが、如何なる理由があったのか不明だが、後に明治大学に移ってその主將をつとめた。氏はテニスばかりでなく、野球のキャッチャーとしてもなかなかの腕をもっていたという。独創力に富んでいたので、テニスの硬球が高価であり一般普及に難色ありとして、準硬球を考案したわけである。

庭球についてはひとかどの主張を持っていたし、なかなかの才人で各方面に発展し、碁、将棋も段をもち、ことに弓道にも大した腕の持主であった。ある時汽車の事故に遭い、視力を失うかと思われたが、それも克服してその後も各スポーツに腕を振った。後年会社の重役に納ったが、テニス界に尽した貢献は見逃せない人であった。氏は昭和15年頃は、株式会社合成化学工業所の専務取締役を務めており、針重敬喜氏の主宰する雑誌「ローンテニス」によく稿を寄せていた。

注

- 1) 福田雅之助, 庭球五十年, 昭和 30, p. 17.
- 2) 日本体協, 現代スポーツ百科事典, 1970, p. 371.
- 3) 森島中良, 紅毛雑話, 天明 7 年, 卷 1, p. 12.
- 4) 針重敬喜, 日本のテニス, 昭和 6, p. 1; 針重敬喜, テニスの人々, 昭和 43, p. 22.
- 5) 伊藤, 鶴原, テニス硬式, 昭和 41, p. 137.
- 6) 針重敬喜, 日本のテニス, 昭 6, p. 2.
- 7) 日本体協, スポーツ八十年史, 昭 33, p. 225.
木村毅, 日本スポーツ文化史, 昭 31, p. 112.
三田土ゴム会社は日本最初のゴム工場で, 明治 19 年 12 月, 土谷秀三が本所横川橋に創設した。当時の技師長・谷口勝次郎がゴム球を試作した。M印ゴム球は「三田土」のイニシャルのMであり, 今は昭和ゴム会社となって, 「赤Mボール」と称している。
- 8) 池尾勝巳, ゴム工業の発展, 昭 23, p. 28.; 小室泰治, 明治大正史 9 巻産業篇, 昭 4, p. 310.
- 9) 石井研堂, 明治事物起源, 明 40, p. 584.
- 10) 福田雅之助, 庭球五十年, 昭 30, p. 61.

- 11) 針重敬喜, 日本のテニス, 昭 6, p. 362.
- 12) 佐野先生記念銅像建設事業会, 一橋学園と佐野善作先生, 1963, p. 24.
- 13) 石井研堂, 明治事物起源, 明 40, p. 584.
- 14) 東京文理大高師, 創立六十年, 昭 6, p. 7.
- 15) 同上, 同上, p. 398.
- 16) 同上, 同上, p. 402.
- 17) 一橋五十年史編纂委員会, 一橋五十年, 大 14, p. 30.; 前出 (12) p. 24
- 18) 前出 (11) p. 7.
- 19) 前出 (12) p. 24.
- 20) 一橋専門部教員養成所史編委会, 一橋専門部教員養成所史, 昭 26, p. 285.
- 21) 一橋五十年史編委会, 一橋五十年史, 大 14, P. 27, P. 74.
- 22) 同上 p. 27.
- 23) 同上 p. 38.
- 24) 日本体協, スポーツ八十年史, p. 229.
- 25) 前出 (21), p. 304.
- 26) 早大庭球部 (福田, 井上, 八十川), 早稲田大学庭球部五十周年史, 昭 28, p. 3.
- 27) 雑誌・ローンテニス, 16 巻, 昭 15 年 1 月号, p. 5.
- 28) 早慶野球戦の中止事件 (スポーツ八十年史, p. 488.) 東京専門学校が早稲田大学となったのは明治 35 年 10 月であり, 早大と慶大の野球対校戦は明治 36 年 11 月に第 1 回戦が行なわれ, 以後春秋 2 回行なうこととなった。この試合は世人の関心も高く, 学生両軍の応援の熱狂ぶりも常軌を逸する状態だった。明治 39 年 10 月 28 日その第一次戦が戸塚運動場で行なわれ, 接戦のすえ 2 対 1 で三田側に凱歌があがるや, 慶応の応援隊は大隈侯邸前にて万歳を三唱して引上げた。これを見た早大学生の無念やる方なく, 11 月 3 日天長の佳節に三田台上に第二次戦が開かれたとき, 吉岡將軍は馬上に早大応援軍を指揮し, 芝園橋から隊伍堂々三田の運動場に乗り込み, 早大軍は河野安通志投手の奮闘よく三振 13 を取り, 押川選手の一打功を奏して, 3 対 0 にて勝利を得た。早大側は前回の遺憾をはらすべく, 一同福沢邸に赴き, 早大の万歳を三唱した。ここにおいて, 両校の野次, 応援の形勢はなほだ不穏なる旨の警報頻々として伝わり, 慶応義塾の当局者は万一の場合をおもんばかって, ついに, 11 月 11 日に予定されていた決勝戦が行なわれるという時, 突如その前日になって, 第三次決勝戦の中止が発表された。中止の表面上の理由は, 両校の学生が熱狂のあ

まり、教育者の責任を問われるような事態を惹き起こすおそれなしとしないから、両校のためにも中止を穏当の処置と考えるということであった。以後復活の声や運動がしばしば起こされたが、慶応当局の承諾するところとならず、天下のファンのごぞって痛惜する中に、大正14年の秋まで実に20年間の長きにわたり中絶されたのであった。

29) 福田雅之助, 庭球五十年, 昭 30, p. 47.

オリンピック大会とテニス

テニスは古い歴史と品位ある伝統をもち、十大スポーツのうちに数えられ、世界の各国によく普及しているスポーツでありながら、現在はオリンピック大会種目のなかに含まれていない。このことについて疑問を持つ人が多いので、そのことについて明らかにしておきたい。

もちろんテニスは、最初のうちオリンピック種目のなかの主要な競技として行なわれていたのであった。すなわち第1回大会(1896, 明治26年)から、第8回パリ大会(1924, 大正13年)まで行なわれ、日本からも第7回アントワープ大会には、熊谷、柏尾選手が出場して、単複ともに第2位を占め(単は南アフリカのレイモンドに熊谷が決勝戦で3:1で敗れ、複はイギリスのターンプル、ウースナムに3:1で敗れた)、第8回パリ大会には福田、原田、岡本、本田(太田急病にて遠征途中上海に留り、本田が代わる)選手等が出場して活躍した。このように、第8回大会まで加わっていたテニスは、第9回から姿を見せなくなった。これについて、日本体育協会編「スポーツ八十年史」(231頁)、「日本スポーツ百年」(277頁)には、“そしてこの後は国際庭球連盟とオリンピック委員会の見解の相違から庭球競技は脱退するのやむなきに至った。”とだけしか述べてない。

オリンピック大会で行なうべき競技種目については、オリンピック競技一般規則の第五条「プログラム」の項に、「公式プログラムは、国際オリンピック委員会の承認した分類に従って規定する。而して次の種目を含む」として、陸上競技、体操、ボクシング、フェンシング、レスリング、射撃、ポート、水泳、馬術、近代五種目競技の10種目を挙げている。故にこの規定から見ると、どうしても以上の10種目

は行なわなければならない必須種目なのである。次に「自転車、重量挙げ、ヨット、サッカー、ラグビー、テニス、ポロ、水球、ホッケー、ハンドボール、バスケットボール、ペロタ及び芸術競技（建築、文学、音楽、絵画、彫刻）の各種目は公式の競技期間において決勝競技を行い得るものを組織委員会において選定の上組み込むことができる」としてあり、これでわかるように、オリンピック組織委員会において実行したいと希望したときは、国際オリンピック委員会の承認を経て組み入れられるものである。

以上の規定から、テニスは実施、除外、いずれでもその時によって自由にできる種目であることがわかる。

さて、テニスにおける国際的な大試合としては、個人戦としてのウィンブルドン大会と、団体戦としてデビス・カップ戦があり、前者の第1回は1877年（明治10年）で、後者の第1回は1883年（明治16年）—正式にデビス・カップ・マッチとして第1回は1900年（明治33年）であるが、そもそもの起りは英米間の交歓試合に起源していた。

こうして見ると、この両者ともオリンピック第1回の1894年（明治29年）よりは10年以上の古い歴史をもった国際的大試合であり、それなりの誇りと伝統、方法、しきたりというものをもっていて、オリンピック以上の重要性をもった行事となっていたのである。そしてデ杯戦の方式は、ゾーンごとの予選があり、デ杯保持国（前年優勝国）に対する決勝戦挑戦までかなりの期間を必要とし、しかもこの間に試合地が何カ国かにまたがるという大変な方式をとっている。たとえば5月頃から始まり8月頃まで3~4カ国くらい東奔西走、南船北馬して決勝まで漕ぎつけるというわけである。したがってこれを考えただけでも、オリンピック大会出場とのかけ持ちは困難である。デ杯戦はテニス界においてはオリンピック以上の重要性をもった伝統的な大会であり、しかも毎年行なわれているというわけで、両立困難となればデ杯戦をとるということになるだろう。

また、オリンピック大会挙行に関する規則のなかの、大会の時期と期間の項に「競技会の期間に開会式の日を加えて16日を越えること

はできない」と定めてある。ところがテニスは、屋外の競技で雨天の日は実施不能である。他の競技はたいいて雨天決行で延期しなくてもできるが、テニス大会は期間延長にならざるを得ないことがある。この点から期日に制限のあるオリンピックには不適当な競技でもある。このようなわけで時期と期間の関係からも両立はむづかしい時がある。また、あるテニスの大家の直話では、1924 年前後頃の国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee, I. O. C.) 会長と、国際庭球連盟 (International Lawn Tennis Federation) 会長とは犬猿の仲であったということも見逃せない事実だった、ということである。

結局、国際庭球連盟としては、デ杯戦の方に重点をおいているのでオリンピックには加わっていないということである。

テニス解説年表

B. C. 500 年頃 (第四代懿徳天皇時代)	<ul style="list-style-type: none"> ・エジプト、ペルシア、ギリシア、ローマなどで掌でボールを打つ球戯が行なわれていた。これは Paume の元祖的球戯で、古代の Hand Ball ともいわれている。 ・ローマ人は Pila という名称で行なっていた。 ・アラビア語の rahat,あるいはラテン語の raha は、手の平を意味する語で、これが racket の語源となっている。
11 世紀以前	<ul style="list-style-type: none"> ・イングランド、スコットランド、ウェルズなどで Le paume の起源となった Hand Ball が行なわれていた。これがフランスに入って、Le paume という球戯ができたらしい。
11 世紀頃	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパの僧侶や貴族が室内競技として、やがてテニスとなる球戯 (Paume 遊び) をしていた。
1230 (後堀河天皇寛喜2年, 鎌倉時代)	<ul style="list-style-type: none"> ・フランスに最初のコートができた。この頃フランスでは Le jeu de paume という名称で行なっていた。ボールは皮のなかに毛をつめ込んで作られたものだった。
1292 (伏見天皇正応5年, 鎌倉時代)	<ul style="list-style-type: none"> ・バリーに“palm play”のボールのメーカーが 30 軒リストされている。

- | | |
|-----------------------------|---|
| 1360 年頃 | <ul style="list-style-type: none"> ・室内競技としてイギリスに渡った Le Paume は、Tennis と呼ばれるようになった。 |
| 1365 (後村上天皇正平 20 年, 室町時代) | <ul style="list-style-type: none"> ・エドワード三世の命により、イギリスに初めてコートができた。 |
| 1490 (後土御門天皇延徳 2 年, 室町時代) | <ul style="list-style-type: none"> ・イギリスで人々がお寺参りよりもテニスを好む傾向となったので、ヘンリー七世 (在位 1485—1509) は法令により、一般市民のテニスを禁止した。 |
| 14 世紀→15 世紀 | <ul style="list-style-type: none"> ・イタリア、フランスで貴族の室内コート・テニスが盛んであった。 |
| 15 世紀末 | <ul style="list-style-type: none"> ・やや形をなしたラケットが現われた。 |
| 1552 (後奈良天皇天文 21 年, 室町時代) | <ul style="list-style-type: none"> ・最初のルールがフランスでつくられた。 |
| 15 世紀→16 世紀 | <ul style="list-style-type: none"> ・フランス製のボールが盛んにイギリスに輸入された。イギリスのボール製造工場 Ironmongers' company はボールに関する保護貿易を請願した。 |
| 1591 | <ul style="list-style-type: none"> ・上記の二度目の請願をした。 |
| 1596 頃 (後陽成天皇慶長元年, 安土・桃山時代) | <ul style="list-style-type: none"> ・ボームの球戯館が、バリーに 250 あった。 |
| 16 世紀 | <ul style="list-style-type: none"> ・英仏でコート・テニスが隆盛をきわめ、パリだけでも 1,800 あまりのコートがあった。 |
| 16 世紀末 | <ul style="list-style-type: none"> ・フランスでは職業選手が現われ、賭が盛んになったため、ついにボームが禁止されるようになり、しだいに衰微の傾向となった。 |
| 1657 頃 | <ul style="list-style-type: none"> ・ボームの球戯館が、バリーに 114 と減じた。 |
| 1678 (霊元天皇延宝 6 年, 徳川時代) | <ul style="list-style-type: none"> ・プレーを楽しくするため、無得点 (zero 零点) を表すのにラブ (love) という語が使用されはじめた。 |
| 1697 (東山天皇元禄 10 年, 5 代綱吉) | <ul style="list-style-type: none"> ・イギリスで Bisk (Bisque, テニスでハンデキャップをつけること) という語が使われはじめた。 |
| 1750 頃 | <ul style="list-style-type: none"> ・フランスで、プロ選手の八百長や賭が行なわれていた。 |
| 1767 (後桜町天皇明和 4 年, 10 代家治) | <ul style="list-style-type: none"> ・クリケット・クラブ員であった William Hickey が、ロンドン郊外で自分達で改善して名づけた「フィールド・テニス」を行なった。 |
| 1787 (天明 7 年) | <ul style="list-style-type: none"> ・長崎出島の西洋館で、ラケットでウーラングを打 |

- つ、バドミントンの如き遊びが行なわれていた。
- 1829 (仁孝天皇文政 12 年, 11 代家斉)
- ・アーサー・ハーベイ卿 (Lord Arthur Hervey) が友人と従来のゲームを改良した。
- 1832 (天保 3 年)
- ・Field tennis が行なわれた絵が残っている。
- 1873 (明治 6 年)
- ・ウィングフィールド (Walter Clopton Wingfield) が Sphairistike と名づける球技を考案発表した。これがローン・テニスの始まりであった (12 月)。
- 1874 (明治 7 年)
- ・ウィングフィールドは、コート of 区画線をテープで作成、「持ち運びできるコート」として特許申請した。
 - ・ヒース・コートというテニスの覇者が、裸のゴム球に白いフェルトをかぶせた球を造った。
 - ・Wingfeild は前年発表の規則を改正した (11 月)
- 1874 (明治 7 年)
- ・Mary E. Outerbridge 嬢がアメリカにテニスを持ち帰って紹介した。
- 1875 (明治 8 年)
- ・イギリスで Marylebone Cricket Club の役員たちが統一規則書を作成した (5 月 29 日)。このときサーバーのみが得点し、1 ゲームは 15 点であった。この頃イギリスで盛んに芝生の上で行なわれたので、ローン・テニス of の名で呼ばれるようになった。
 - ・アメリカでもローン・テニスと呼び、ステートン島にはじめてコートがつくられた。
 - ・アメリカのウィリアム・アップルトンが用具一式を輸入して、ナハントの別荘に正式のコートを作ってやり始めた。ドゥワイトやセアーズ等がこのコートでプレーした。
- 1877 (明治 10 年)
- ・全英クロケット・クラブが「All England Croquet and Lawn Tennis Club」と改称し、ローン・テニスを追加採用した。規則委員が任命され、従来鼓形だったコートが 78 呎×27 呎 of の長方形に改良され、「ラケット」(Rackets, 種目名) of のスコアの代わりに「テニス」 of のスコアを採用し、Fifteen, Thirty, Forty と記録するようになった。
 - ・最初のローンテニス選手権大会がウィンブルドンで開催され、これがウィンブルドン大会 of の始まり

- となった。その時 22 名の参加者があり、優勝者は Rackets の名手 Spencer W. Gore であった (7 月 9 日)。
- 1878 (明治 11 年) ・ 6 月リーランド来朝, 9 月体操伝習所設置さる。リーランドが伝習所にテニスを紹介した。
- 1880 (明治 13 年) ・ この年イギリスで改良された規則が現在の規則の骨子となった (ネットからサービス・ラインまでの距離が 21 呎とか, ネットの高さ, サイドの交替の方法, サーブの時両足をベースラインの外に置くなど)。
- 1881 (明治 14 年) ・ アメリカのステートン島で最初のトーナメント大会が開かれた (9 月)。この時アメリカでは統一ルールがなく, 使用球も一定していなかった。
- 1883 (明治 16 年) ・ 合衆国ローン・テニス協会 (U. S. Lawn Tennis Association) が創設され, 統一ルールに基づく全国トーナメント第 1 回大会がニューポートで開かれた。
- (同年 6 月 11 日) ・ 英米間にて非公式のテニス試合が始められたが, これが 1900 年のデ杯戦に発展した。
- 1884 ・ 米国ステートン島婦人戸外スポーツクラブは, はじめて女性対象のテニス・トーナメント大会を開催した。
- 1885 (明治 18 年) ・ 日本において, F. W. Strange が丸善書店から「Outdoor Games」を出版し, そのなかで Lawn Tennis の解説をしている。
- 1886 ・ 坪井玄道がテニスを公開した。
- 1887 (明治 20 年) ・ 坪井玄道, 田中盛業共著「戸外遊戯法」出版され, ローン・テニスも紹介された。
- 1887 ・ イギリス宣教師 A. ショーが軽井沢を避暑地として利用し始めた。
- 1887 ・ アメリカの女子選手権トーナメントが公式的にフィラデルフィア・クリケット・クラブで行なわれた。
- 1887 ・ アメリカ西部にもテニスが波及し, カリフォルニアでも最初の州選手権トーナメントが行なわれた。
- 1887 ・ 東京高商の一部の学生がテニス (硬式) をやり始

- めた。
- 1890 (明治 23 年) ・三田土ゴム会社が東京高師の委嘱により軟球を製造し始めた。
- 1891 (明治 24 年) ・全仏テニス選手権大会が、ローランギャロス (パリーの有名な庭球場) にて初めて開かれた。
- 1892 ・この頃すでに、軽井沢でテニス・トーナメントが行なわれていた。
- 1896 (明治 29 年) ・東京高師に運動会が組織され、ローンテニス部、フットボール、ベースボールなど7部が設けられた (3 月)。
- 1898 (明治 31 年) ・東京高師対高商の第1回テニス大会がお茶の水で開かれた (11 月 20 日)。
- 1898 頃 ・この頃ボール1個の値段が7銭であったが、だんだん騰貴して、8 銭, 10 銭, 12 銭, 15 銭となった。
- 1899 (明治 32 年) ・D. F. デビスが 1883 年以来行なわれていた英米間のテニス試合に、カップの寄贈を申し出た。
- 1900 (明治 33 年) ・デビス・カップ戦が正式名を「The International Lawn Tennis Championship」と名づけて始められた。
- ・東京ローンテニス倶楽部創設。
- ・高橋清一が「実験ローンテニス」なる著書を金昌堂より出版。
- 1901 (明治 34 年) ・慶応義塾大学庭球部創設。
- 1902 (明治 35 年) ・この年の春、慶応は初めて東京高師に挑戦し、5月7日大塚のコートで試合。
- ・東京高師は関西に3月31日よりテニス遠征に出発、関西のテニスを刺激した。
- ・5月18日高師主催で東都12校を招待し、連合テニス大会を開く。
- ・5月24日高師対外語の試合。
- ・高師庭球部は9月に「ローンテニス」(橋本吾作、秋田友作、辻信一等執筆)を出版、この書でネットの高さを3尺2寸くらいにすると快球が打てるという意見を出している。坪井等の「戸外遊戯法」のローン・テニスの解説に、「網ノ高サハ三尺以上四尺以下ナルベク」とあるためか、当時一

般に三尺五寸から四尺くらいでやっていた。

1903 (明治 36 年)

- ・ 12 月に高見沢宗蔵が「ローンテニス術」を尚栄堂より出す。
- ・ 10 月 19 日高師対高商の第 5 回あり、高師は 2 回戦以来連敗。
- ・ デ杯戦に英米以外の各国参加を認め、ゾーン制となる。
- ・ 早大庭球部誕生 (10 月)。その他の各校にも、前年頃からテニス部創立され、対校試合盛んとなる。
- ・ 高商対慶応、高商対早大の練習試合を行なう。
- ・ 高師対学習院、高師対早大、高師本科一年対美術学校等開始さる。
- ・ 9 月に渡辺精一が「ローンテニス」を出版。
- ・ 10 月に東京高商庭球部 (片柳台三、浜崎素、和田益得、竹下次男等執筆) 編の「ローンテニスの友」が新橋堂書店より発行さる。この書では「テニスに用ふるボールに二種ある。即ちテニスボール及びゴムマリの二即ち是れ、テニスボールは特にテニス用として作られたもので、厚いゴムのボールをフランネルで蔽つたもの。然し此ボールは其価高きを以て我邦にては一般に用ひられぬ。我邦で現今用ひらるるものは此の代用として普通のゴム球で目方も至つて軽い」とあり、硬球は高価であるため使用できなかつたことが明記してある。

1904 (明治 37 年)

- ・ この年まで日本庭球界は高師、高商の天下だった。以降早慶を加えた 4 大雄鎮の時代に入る。
- ・ 春早大は高師を、秋慶応は高商を破り、10 月 29 日三田台上で、早慶第 1 回戦を開く (日没中止)。
- ・ 10 月 16 日伝統の師商戦で、高師は雌伏 6 年、第 2 回以来の汚名を返上した。
- ・ 高師、高商、慶応、早大の 4 校の委員が高師に集まって「庭球要項」を作製し、最初の軟式庭球規則の基礎ができた。

1905 (明治 38 年)

- ・ 4 月 23 日、高商主催の府下各学校連合テニス大会が開かれた。

- ・ 5月14日第2回早慶戦の最中、慶応の主将小泉信三が病気になり二時間余休止し、回復後再開した。当時はまだ棄権にする規定も判然としていなかったためである。
 - ・ テニスが新聞記事に載り始めたのはこの頃からである。すなわち11月8日の万朝報に“早慶戦中止に、審判水谷(早)が伊藤のボールが四寸も出たのをインにした。立合審判青木(慶)の異議は当然である。これによって慶応は大部損をした。本月三日電報新聞の「秋の庭球界」は不快である”と載っている。
 - ・ 全オーストラリアテニス選手権大会始まる。
 - ・ 4月10日東大対京大戦始まる。東京帝大がテニスで表面的に顔を出したのはこれが最初である。
 - ・ 高商対早大(10月16日)および早慶戦(10月22日)共にボールのイン、アウトで紛擾し、両試合とも中止となる。審判法(第三者を審判員に依頼せず双方から半数ずつ出した)の不備、選手の状態などに問題があったためと見られる。
 - ・ 神戸高商庭球部創設、関西の各学校、会社銀行にも普及、(同志社、大阪高工、大阪高商、京都商工芸、岡山医専、各師範、三井物産など)。
- 1906 (明治 39 年)
- ・ 神戸高商は対東京高商戦(4月28日)のため上京したが、その小手調べのため、高師、慶応、早大と戦ったが全敗した。
 - ・ 早慶は高師、高商を凌駕しはじめた。早大は関西に遠征し(12月6日)、同志社、三高をコーチし、大阪師範、御影師範、神戸高商、大阪高商、社会人チームなどと戦ったが、全勝して関西に多大の影響を与えた。
- 1907 (明治 40 年)
- 1908 (明治 41 年)
- ・ 関西の各学校の対校戦盛んとなる。
 - ・ 浜寺大会(関西中等諸学校連合大会、浜寺公園にて、後年中百舌に移る)始まる。初回20校参加(大阪毎日主催、7月26日)。この頃までに社会人のテニス倶楽部が若干あった(青山倶楽部、KB倶楽部など)。しかし技倆は学生に及びもつか

- なかった。
- 1909 (明治 42 年)
- ・明治大学テニス部創設、仲間入り披露の意味で4月18日各校を招き連合大会を駿河台コートに開く。
 - ・早大庭球部が「最近庭球術」なる書を4月に運動世界社より出版。
- 1910 (明治 43 年)
- ・慶応は関西遠征に出る(12月26日)。
 - ・早大は第2次関西遠征に出る(4月)。
 - ・東京帝大、福岡大の京都遠征、東京高商の下神など、テニスの遠征試合が盛んであった。
- 1911
- ・京都帝大主催第1回全国高専庭球大会(4月6日より4日間)。
- 1912 (明治 45 年)
- ・硬式テニス選手2名(朝吹常吉、山崎健之丞)マニラのカーニバルに日本代表として日本から国外に出て国際試合に参加した(2月2日—10日)。
 - ・京浜中等学校テニス大会(4月29日)、武俠世界社主催、早大コートにて。
 - ・明治後年から大正初めにかけて、女学校にもテニス普及されてきた。ことに関西の女学校が盛んであったが、公開試合は行なわれなかった。
- 1913 (大正 2 年)
- ・慶応は2月19日に硬式採用を決定し、4月より練習を開始。
 - ・慶応の4選手(熊谷一弥、野村裕一、市川重三、三嘴進)マニラの東洋選手権大会に出場(12月16日—1月21日)。この時熊谷選手は、アメリカのジョンストン、フォットレルと互角に戦い、世界的プレーヤーとして活躍した。
- 1914 (大正 3 年)
- ・高師、高商、早大の3校主催で全国中等学校庭球大会開く(11月早大コート)。
- 1915 (大正 4 年)
- ・神戸高商主催第1回関西中等庭球大会(6月)。
 - ・第2回極東選手権競技会(上海にて5月14日より)に陸上8、水泳1、テニス2(熊谷、柏尾)、自転車1、外2計14名参加。テニスは単複に優勝す。
- 1916 (大正 5 年)
- ・マニラの東洋選手権大会(1月1日より)に、マニラテニスクラブからの招待で、熊谷、三神両氏出場しシングルスで熊谷選手優勝す。

- ・ 5月熊谷、三神は朝吹氏の後援を得て渡米し、三カ月間テニス修業（5月31日出発、10月7日帰京）。
 - ・ 清水善造は、三井物産インド・カルカッタ支店に在勤中硬式を練習し、ベンガル州選手権大会に出場し、選手権を獲得、以後8年まで選手権を確保した。
- 1917（大正6年）
- ・ 大阪では、三神八四郎の提唱により豊中にコートを設け、各大学の先輩を集め、大阪ローンテニス倶楽部を作る。
 - ・ 第3回極東選手権競技大会が芝浦に開催（5月8日—12日）、テニスでは熊谷、松原、三神選手出場、熊谷、三神組の複と、熊谷の単がフィリピンと決勝し優勝す。
- 1918（大正7年）
- ・ 熊谷は三菱銀行ニューヨーク支店勤務中、全米ランキング7位となる。
 - ・ 早大は満鉄の招待を受け鮮満遠征に出発（6月29日）。
 - ・ この頃から関西で女学生庭球大会を開催し、毎年これを続行した（大阪時事新報主催）。また大毎の浜寺大会にも女子のテニスを加えるようになった。（関東では大正10年から女学生大会を開いた）。
- 1919（大正8年）
- ・ 熊谷は全米ランキングでジョンストン、チルデンに次ぎ3位となる。
 - ・ 三神氏は日本テニス硬球化への先覚者であったが、渡比中落馬が原因でダバオ病院にて客死（12月7日）。早稲田には三神記念コート4面が設けられた。
 - ・ 東京高商は満鮮遠征に出る（7月—8月）。
 - ・ 神田の高商コートでOB大会開かる（8月30—31日）。これ関東における最初のオープン大会で後年、東日トーナメント、さらに毎日トーナメントと発展した。
- 1920（大正9年）
- ・ 清水善造が全英庭球選手権（6月22日—7月7日、ウィンブルドン大会）に出場し、決勝戦まで進みチルデンに惜敗。この試合で相手が転倒した

1921 (大正 10 年)

- とき、ゆるい球を送って好評受けた美談を残した。
- ・第7回オリンピック大会(アントワープ、8月15日—29日)にテニスでは熊谷、柏尾が出場し、単、複に銀メダルを獲得す。
 - ・慶応テニス部は上海に遠征(7月—9月)。
 - ・東京高商は硬式採用を決定し、軟式廃止記念を兼ね蒲田新設コート開きを挙(9月26日)した。これに続いて高師、早大も同調したので全国各大学高専の多くが硬式採用に傾き、日本で真の意味の硬式化はこの年からであった。
 - ・全国硬式テニス大会(大阪朝日主催)が大阪ローンテニス豊中コートで行なわれた(11月23—25日)。これが日本での硬式大会の始めである。
 - ・デ杯戦に日本初めて参加、熊谷、清水、柏尾選手の活躍でインド、オーストラリアを破り、デ杯保持国アメリカに挑戦して敗れた。(柏尾はマネージャーをつとめノン・プレーであった。)
 - ・清水選手はデ杯戦への途次ウィンブルドン大会に参加し、イギリスのライセットやスペインのアロンゾと戦った際、態度の立派さで再度評判を高からしめた。
 - ・第5回極東選手権競技大会(5月、上海)に奥村、田中、浅野、北川、三上参加。熊谷、清水、柏尾など留守中のため比国に敗れた。
 - ・東京商大対神戸高商戦(11月12日、蒲田商大コートにて)、東京敗る。
 - ・清水選手帰朝歓迎試合が各地で行なわる。東京帝大コート(11月5日)、大阪豊中コート(11月15日)、芝浦、名古屋庭球場など。
 - ・摂政宮殿下、各宮殿下台覧試合(12月17日、宮城内千代田倶楽部コート、木島、安部、鳥羽、太田、岡本、原田、木村、清水出場)。
 - ・日本テニス界の硬式化が進み、日本庭球協会設立準備進捗に対し、軟球方面では東京軟球協会設立の計画を進めていた。当時軟式に踏み止まっていたのは、東京医専、東洋大、国学院、中央大などで、倶楽部としては、金門、庚申、臨水、目黒、

1922 (大正 11 年)

- 大崎、芝浦 ST, 鉄道省, 東洋紡績の 8 倶楽部などがあった。
- ・関東女学校庭球大会が、時事新報の主催で、学習院女学部コートで開かれた。この頃女学校選手の試合出場には各方面から賛否両論があって、この開催には非常な苦心と努力を要した。しかし学習院のコートを会場に選んだことが出場校や選手の父兄に安心感を与え、決定、参加に支障を来さなかった。
 - ・日本庭球協会創立、朝吹常吉氏会長となる (3 月 11 日)。
 - ・東京、神戸両商大戦 (4 月 8, 9 日)。
 - ・関西専門学校対校戦 (4 月—6 月)。
 - ・熊谷選手帰朝歓迎試合 (4 月 22 日、四谷慶応病院コート)。
 - ・摂政官台覧、熊谷選手招待試合 (5 月 6 日、新宿御苑コート)。
 - ・東京ローンテニス倶楽部のオーブントーナメント戦 (6 月 5 日)。
 - ・カリフォルニア大学選手ベーツ、コンラット、ウィルソン、ゼンソンの 4 氏来朝し各大学と試合 (5 月—6 月)。
 - ・関西夏季トーナメント (7 月 16 日、豊中コート)。
 - ・満鉄招待遠征 (針重監督以下 15 名, 8 月)。
 - ・日本庭球協会主催第 1 回全日本男子選手権大会 (東京帝大コート, 9 月 9 日—15 日)。
 - ・東都大学専門学校大会 (東都カレッジ戦, 9 月)。
 - ・柏尾選手帰朝歓迎大会 (9 月 23 日, 神戸高商コート)。
 - ・KS カップ東西対抗戦 (第 1 回, 10 月 29 日鳴尾コート, KS は熊谷、清水の頭文字で両氏の功労記念の意)。
 - ・関西カレッジ・トーナメント (11 月)。
 - ・第 1 回関東女子トーナメント大会 (11 月 18, 9 日, 竹早第二高女コート, これが女子最初の硬式大会で、この時学習院の柳谷が自由学院の羽仁説

1923 (大正 12 年)

- 子を破って優勝した。
- ・硬式採用, 日本庭球協会設立, 国際試合参加, その選手達の帰朝などでこの年の庭球界は突如花盛りの観を呈した。
- ・福田選手デ杯戦出場送別試合 (3 月 25 日, 早大コート)。
- ・第 6 回極東選手権競技会 (5 月, 大阪築港コート) に鳥羽, 原田, 安部, 川妻選手出場し優勝す。この大会で女子オープン試合に金田, 田村, 梶川, 戸田が出場。
- ・女子選手久邇宮家からの招待試合 (6 月 10 日, 渋谷久邇宮邸内コート)。
- ・第 2 回関東女子大会 (4 月 9, 14, 15 日) が東京ローンテニス倶楽部コートで開催 (羽仁説子, 田村富美子, 三井栄子, ストレラー, ボサンピアなど出場し, 観客にも名士が顔を並べ, 甚だ華かであった)。
- ・第 1 回関西女子大会 (4 月 21 日—23 日, 中山の片岡コート)。
- ・東西女子庭球対抗大会 (4 月 30 日, 東京ローンテニス倶楽部にて)。
- ・清水, 柏尾, 福田選手デ杯戦に参加。アメリカ・ゾーンの決勝戦にてオーストラリアに敗れた (8 月 9 日より 3 日間, シカゴにて)。
- ・東京軟球協会が結成され (3 月), その第一回大会が鉄道省コートで開かれた (8 月 25, 6 日)。
- ・東京軟球協会は日本軟球協会と改称し, 第二回大会を帝大コートで開催 (8 月 29, 30 日)。
- ・9 月 1 日の大震災でスポーツの衰微を憂慮されたが, 体力養成の必要のため却って奨励される傾向となった。またアメリカのテニス界や在留の日本選手から震災被害救済の資金が日本庭球協会に託送された。
- ・ワイトマン・カップ (Wightman Cup) 試合が英米間で始められた。
- ・第二回全日本男子選手権大会 (11 月 19 日より, 大阪豊中, 築港両コート)。

1924 (大正 13 年)

- ・日本庭球協会で優秀選手ランキングをはじめて発表 (1 月). 単は原田 (慶), 鳥羽 (神高商), 太田 (東高師), 真田 (神高商), 俵 (三高), 複は, 安部・川妻 (早), 原田・青木 (慶応), 吉田・小林 (関学), 鳥羽・鷺見 (桜), 請川・ハナ川(早)の順.
- ・早慶第 1 回戦庭球 (4 月 26, 7 日, 大森慶応コートにて).
- ・第 4 回関東学生トーナメント (5 月 7 日).
- ・第 1 回全日本女子硬球選手権大会 (5 月 30 日より, 東京ローンテニス倶楽部にて).
- ・第 8 回オリンピック大会 (パリ) に, テニス選手 4 名 (原田, 福田, 岡本, 本田—太田急病のため本田代わる, 7 月 5 日—13 日).
- ・デ杯戦に清水, 福田, 岡本, 原田出場, オーストラリアに敗退 (カナダのモンリオール, 8 月).
- 第 1 回軟式東西対抗 (10 月 17—18 日, 大阪宝塚コート).
- ・第 1 回明治神宮体育大会の種目に軟式庭球なし, 軟式人を激怒させた.
- ・第 3 回全日本男子選手権大会 (9 月 7 日より慶応, 早大コート).
- ・全日本中等学校軟式大会第 1 回を 8 月 16, 7 日両日, 東京高師コートで開催した (翌年の第 2 回は文部省後援となり, 第 3 回からは女子部も設けられた).

1925 (大正 14 年)

- ・この年, 日本の第一線選手原田, 福田, 清水などは年頭よりアメリカにて研究練習し, アメリカ国内の各種試合に出場して活躍していた.
- ・3 月 21 日より大阪毎日主催トーナメント大会 (豊中, 神崎川コート), 単 128 人, 複 51 組参加.
- ・3 月 21 日, 第 3 回女子トーナメント (神崎川コート), 単 17, 複 7 組参加.
- ・4 月, 大阪毎日の招待でアメリカのキンゼー兄弟とスノッドグラスの 3 選手来朝, 各地で模範試合. 4 月 5, 6, 7 日浜寺コート, 9 日名古屋, 10 日新宿御苑にて摂政官台覧試合, 11 日—14 日慶応

コートなど。

- 4月 18 日, 関東女子硬式大会 (東京ローンテニス倶楽部), 単 14 名, 複 6 組参加。
- 5月 1 日より, 第 5 回関東学生大会 (早大その他コート使用), チョップの日本の元祖といわれた明大の横山が単に優勝。
- 5月 6 日より, 関西学生大会。
- 5月 16 日より第 7 回極東選手権競技会 (マニラ)。鳥羽, 太田, 吉田, 小林ならびに女子の戸田, 藤本と岡田四郎監督, 男女とも日本優勝。
- 5月 23 日より第 1 回関東男子選手権大会 (早慶両コート)。
- 7月 13 日—19 日, 第 4 回関西男子大会 (豊中コート)。参加者 83 名, 複 34 組, 大阪高商卒で安宅商会にいた三木断然強く優勝。
- 8月 13 日—15 日, デ杯戦に原田, 清水出場, スペインを破る (バルチモアにて)。
- 8月 18 日—21 日, デ杯戦のアメリカ・ゾーン決勝に原田, 清水, 福田出場し, オーストラリアに敗る。しかし原田はこのデ杯戦でスペインのアロンゾとオーストラリアのバタソンの世界的 2 大プレーヤを堂々と倒し, 一躍世界一流のレベルに達したことを世に示し, 氏のフォアの強打は熊谷, 清水を凌いでいた。
- 8月 30 日—9 月 7 日, 第 4 回全日本男子選手権 (大阪豊中, 神崎川両コート)。124 人, 複 64 組参加。
- 9月 14 日, フォレストヒルの全米大会に, 原田, 福田, 岩崎, 恩田の 4 選手出場。
- 9月 19 日, 早慶戦 8:1 で早大勝す。
- 10 月 3 日, 高師, 商大戦は 7:2 で商大勝つ。
- 10 月 11 日, KS カップ戦。
- 10 月 16 日, 第 2 回全日本女子大会 (東京ローンテニス倶楽部コート)。19 人, 複 8 組参加。
- 10 月 20 日より東日トーナメント大会 (豊島園コート)。単 133 人, 複 56 組参加。
- 11 月 11 日より, 明治神宮大会。男子, 女子,

1926 (大正 15 年)

- ・ジュニア別に行なう。
- ・明治神宮大会の軟式の女子参加校は 112 校、男子は 164 校の多きを見た。(日本軟球協会は神宮ルールに反対して、大会不参加を決議した。)
- ・11 月 8 日、大正 12 年春渡米した福田雅之助氏は、3 ヵ年の在米生活を終え帰朝。この日庭球協会の歓迎試会が早大コートで催され、氏のイースタン・グリップの紹介は大きな波紋を与えた。
- ・軟式の第 2 回東西対抗が東京京華中学で行なわれ、関東勝つ。
- ・4 月 25 日、関東インカレ (早慶帝大コート)。単は早の相沢、複は早の安部・川尻組優勝。
- ・4 月 30 日関東女子大会。18 人、10 組参加、朝吹夫人活躍。
- ・5 月 24 日第 2 回関東男子大会 (早慶立教高師各コート、124 人、複 55 組参加)。
- ・第 5 回関西男子大会 (7 月 11 日より、針重氏“日本の庭球”では 4 月下旬とある。神崎川、豊中コート)
- ・6 月 11 日—13 日デ杯戦に、原田、俵、清水、鳥羽が選ばれ、まずメキシコを 4:1 で破る (メキシコ市にて)。
- ・6 月 25 日—27 日、デ杯戦でフィリピンを 5:0 で破る (金門公園キーザーコート)。
- ・8 月 19 日—21 日、デ杯戦、キューバを 5:0 で破る (カナダのモントリオール)。
- ・8 月 26 日—28 日、デ杯戦、フランスに、2:3 で敗退す (ニューヨーク郊外フォレストヒルス)。
- ・8 月 28 日—9 月 6 日、第 5 回全日本選手権大会。参加者 125 人、複 57 組、早慶帝大各コート使用、太田優勝、複は麻生・相沢組。
- ・9 月、在米中の原田、鳥羽、俵の 3 選手はフォレストヒルスの全米シングルス大会に出場。
- ・9 月 18 日、早慶戦、5:4 で早の勝利 (早大コート)。
- ・10 月 2, 3 日、高師商大定期戦、8:1 で商大大胜す。

1927 (昭和2年)

- ・KS カップ戦, 9月19日関西と九州で関西の勝利(甲子園コート). 9月24日関西と関東で戦い, 関東辛勝す(浜寺コート).
- ・10月11日, 原田, 俵選手の帰朝. 摂政官台覧試合(新宿御苑). 17日歓迎試合(大森コート). 23,4日関西歓迎試合(浜寺).
- ・11月, 明治神宮競技, 男, 女, ジュニア別に
行なう.
- ・7月29,30日, 軟式協会主催の全日本選手権を
陸軍戸山学校にて.
- ・神宮ルールによる第2回軟式明治神宮大会, 男子
208人, 161組, 女子33人, 87組の参加. シ
ングルスはこの時が最初であった.
- ・12月, 日本軟球協会に対立して神宮ルールを承
認する「全日本軟式庭球連盟」が設立された.
- ・この年, 原田武一は全米ナショナル順位で, チル
デン, アロンゾに次ぎ第3位, イギリスのマイヤ
ーズの世界ベストテンの第7位にランクされた.
- ・4月上旬, 第6回大毎トーナメント.
- ・4月23日より, 第7回関東学生大会, 早, 帝大,
高師, 学習院コート.
- ・4月末, 大阪ローンテニス倶楽部10周年大会.
- ・5月1日, 関東女子大会.
- ・5月5日より, 第1回朝日招待トーナメント(大
森コート).
- ・5月28日—6月8日, 第3回関東男子大会(早
慶コート).
- ・7月22日—27日, 第6回関西男子大会(甲子
園, 浜寺, 神崎川).
- ・8月28日より, 第8回極東大会に, 相沢, 佐藤
(俵), 松浦, 井上出場, 中国に惨敗す(上海).
第一線選手はデ杯戦で留守のため.
- ・7月~8月, デ杯戦, 4:1でメキシコを破り(セ
ントルイス), カナダを3:2で破る(モントリオ
ール). これで日本はアメリカ・ゾーンに優勝.
8月25日より欧州ゾーン代表フランスと対戦
(ボストン郊外ロングウッド), 5:0で惨敗した.

この時の選手は、太田、三木、原田、鳥羽であった。

- ・10月15日、第4回全日本女子大会（慶大コート）、ハワイから遠征して来た森分嬢が常勝黒井を破って優勝した。
- ・10月16日、太田、三木両選手帰朝歓迎試合（大森慶大コート）。
- ・10月22日より、大阪毎日の招待で来日したアメリカのリチャーズ各地で模範試合。イースタン・グリッブ、ボレー、ネットプレー、スライスなどの妙技に貢献するところ多し、各宮殿下の台覧試合も行なわれた。
- ・11月、神宮競技大会。
- ・11月15日、全日本男子選手権決勝（浜寺）。
- ・昭和2年のランキングは3年1月5日発表された。安部、石井、青木、三木、牧野の順。
- ・軟式界では、日本軟球協会と全日本軟式庭球聯盟の対立があり、この両者主催の全日本選手権大会が、同一期日の8月27、8日、前者は戸山学校、後者は本郷帝大コートで同時に行なわれた。
- ・また全国中等学校大会も、両者主催のものが8月6日からと8月14日から開催され、選手は平然とそのいずれにも出場するという状態だった。
- ・第4回神宮競技の軟庭試合も明治神宮体育軟式庭球競技規則（俗に神宮ルール）で盛大に行なわれた。
- ・この年、合衆国では職業ローンテニス協会が結成され、テニスのプロが誕生し、同じ頃ヨーロッパにもプロができた。
- ・イギリスでは縫目のない硬球ができた。
- ・日本でスポーツ放送が行なわれ初めたのもこの年の8月13日であった。
- ・春早いうちに、大毎トーナメント、春の早慶戦、デ杯出場のため日本に立寄った中国の林、江選手を迎えての歓迎試合が行なわれた。
- ・4月28日、関東インカレ（各校コート）では商大の牧野、復は慶応の志村・山岸組が優勝した。

1928（昭和3年）

- ・ 5月に入り、関東、関西両支部選手権大会が、女子も交えて行なわれた。
- ・ デ杯戦には安部、太田、鳥羽選手が出場、4月28日よりの対キューバ戦（ハバナにて）は5:0で快勝。5月25日より対カナダ戦（モントリオール）は3:1で勝ち、続いてシカゴで開かれた対アメリカ戦では0:5で敗れた。モントリオールからシカゴへと一昼夜の汽車旅行での急行はアメリカの横暴で充分休養ができなかったのも敗因の一つであった。
- ・ 6月7日より、朝日招待大会（大森コート）は、あらかじめ選抜された単16、複8組で、またミックスダブルスも行なわれた。
- ・ 7月12日、第1回東西学生対抗（浜寺）は5:4で関東の勝ち。
- ・ 高校大会では東京商大が優勝。
- ・ 慶応の6選手が天津、北京方面の北支へ遠征、全勝した。
- ・ 8月には、第1回全日本ジュニア選手権（浜寺）。
- ・ 女子選手権は豊中コートにて。
- ・ 9月1日—11日、第7回全日本選手権（上井草、大森両コート）。
- ・ 9月16、7日、秋の早慶戦。
- ・ この秋、商帝戦、同志社対立教、法政対関大、名古屋では山階宮杯トーナメントやKS杯争奪東西対抗戦が行なわれた。
- ・ 10月15日、第10回東日トーナメントは男子、少年、老人に分れて戦った。
- ・ 10月17日、清水、鳥羽選手帰朝歓迎試合が大森コートにて。
- ・ 11月下旬、関東OB対学生の大会が開かれ、OBでは清水、俵、福田、青木等も出場したが現役に大敗した。しかし商大OB清水が学生No.1の牧野（商大）を破ったのは流石であった。
- ・ この年のランキングは、牧野、佐藤（俵）、喜多山、鴨打、佐藤（次）の順であった。

1929 (昭和4年)

- ・軟球界では、二派に分れて対立していた軟球協会と軟庭連盟との協定が成立し「日本軟球連盟」なる統一団体が4月7日に発足した。
- ・7月8,9日,第1回全国大学高専選手権大会(早大コート)。
- ・8月12,13日,全日本中等学校大会(戸山学校)。
- ・10月1,2日,全日本選手権大会(前年は二つの全日本が行なわれた)が統一されて,戸山学校で権威あるものとして行なわれた。
- ・10月17,18日,第4回東西対抗戦(名古屋七本松コート),単は関東,複は関西が勝った。
- ・4月27日,第1回宝塚招待トーナメント(この年から始まる)。
- ・デ杯戦には,安部,太田,恩田選手が出場。第1回は不戦勝,アメリカ組とワシントンで戦い(5月23—25日),太田がバンラインに一勝したのみで4敗した。
- ・7月14日,第1回東海大会(名古屋,七本松)。
- ・8月18日,協会主催で第1回全日本学生選手権大会(上井草,早大コート,本年より)。
- ・10月16日,協会の招待でフランスのコンェ,ブルニヨン,ランドリー,ローデルが来日。三年町の4000人を容れる新設コートで秩父宮以下各宮殿下台覧で模範試合。10月20日よりは関西(甲子園)で日仏対抗戦を催した。
- ・6月28日,デビス氏がヒリピン総督として赴任の途上日本に立寄り,歓迎を受けた。
- ・第6回明治神宮大会には国産の硬球を使用した。
- ・その他恒例の大会,対抗戦,定期戦は各地で盛大に実施された。
- ・この年の硬式ランクは,原田(武),佐藤(俊),佐藤(次),布井,原田(直)の順であった。
- ・軟式界も従来のものはそのまま続けられた。
- ・8月17,8日東西対抗戦は本年より中部を加えて行なった(戸山学校)。
- ・明治神宮大会は,一般男子は府県対抗となり37県が参加した。女子はオープンで参加者は単89,

1930 (昭和5年)

複 130 組で盛観を呈し、技倆も大いに進歩した。一般男子と別に中等学校の部が加えられ、参加校 72、シングルス 65 人であった。

・この年のデ杯戦は、太田、安部、佐藤（俵）の 3 選手で、日本は欧州ゾーンに参加した。その理由は試合が多くて興味があること、欧州に日本のテニスを知らせたいということであった。

1 回戦は対ハンガリー、5 月 2 日から（ブタペスト）4:0 で勝つ。

2 回戦、対インド（ロンドンにて）、5 月 8 日より 4:0 で勝つ。

3 回戦は対スペイン、6 月 7 日より（バルセロナ）4:1 で勝つ。

4 回戦対チェコ、6 月 14 日より（フラーグ）3:2 で勝ち進み、ゾーン決勝はイタリアと 7 月 13 日より 3 日間ゼノアで戦ったが、2:3 で惜敗した。

・デ杯戦の間にデ杯各選手および三木選手らは、ウィンブルドン大会や各地の試合に出場。

・2 月から 3 月にかけては、佐藤（次）、布井選手がヒリピン、ハワイに遠征。

・5 月 24 日よりの極東大会（東京）に、佐藤（次）、布井、山岸、志村選手が出場して優勝。

・7 月—8 月、明大テニス部員が中支、南支、ヒリピン遠征。

・4 月 7 日、太田、安部の帰朝。

・1 月 17 日、原田、佐藤（俵）選手の帰朝歓迎試合を東京、大阪で行なう。

・軟式では極東大会のエキジビション・ゲームとして、軟球の試合がプログラムに加えられた。

1931 (昭和6年)

・1 月 24 日、全日本学生庭球連盟設立。

・デ杯戦選手として佐藤（俵）、佐藤（次）、川地が出場。対ユーゴスラビヤと 5 月 9 日より 3 日間（ザクレブ市）戦い、5:0 で快勝。6 月 2 日よりの対エジプト戦はバリーにて、これまた 5:0 で快勝。6 月 12 日よりイギリスとデボンシャーパークコートで行ない、0:5 で惨敗した。

1932 (昭和7年)

- ・ 1月, 年頭早くもマニラで行なわれた比島選手権に山岸, 志村が出場し, 単(志村)複ともに優勝.
- ・ 3月27日からのハワイ, ミッドパシフィック大会には, 桑原, 秋元が出場. 複で決勝まで進出して敗れた.
- ・ 6月, 慶応庭球部がカナダ大学庭球選手10名を招待.
- ・ 10月24, 5日, 第1回学生東西対抗庭球大会(早大コート).
- ・ 11月23日, アメリカのウィルス・ムーディ夫人(世界女子庭球の第一人者)来日, 歓迎試合.
- ・ この年, アメリカのチルデンはプロテニス入り, マディソン・スクエア・ガーデンでの氏のデビューには観衆13,600人, 入場料は36,000ドルに達した.
- ・ 軟庭界では, 新旧規則の問題をめぐって, 再び混乱を起こしはじめた.
- ・ この年のデ杯選手は, 三木, 佐藤(次), 桑原, 5月よりギリシア, デンマークをとともに5:0で敗ったが, 7月ミラノでの対イタリア戦は3:2で惜敗.
- ・ 1月—2月, 原田, 布井の豪州遠征.
- ・ 11月—翌1月, 佐藤(俄), 川地, 三木選手, インドに遠征し, 全勝した.
- ・ 軟球界混迷の年, 旧規則への還元を決議した「日本軟球連盟」と, 神宮ルール支持派の「日本軟球連盟」は同じ団体名を用いて対立し, 関東学生連盟の一部からは別にまた一団体を結成し, 大阪の鳥山隆夫は準硬球なるものを考案して独自の立場を声明し, 各団体は使用球を, 丸菱ボール, 赤Mボール, 角一ボールと別々に推し, 軟庭界の南北朝, 否四分五裂しながら戦国時代の様相を呈した. この惨状を見かねて秋頃から歩み寄りの斡旋に努力する人達が現われた.
- ・ この間にも, 恒例の大会は両連盟によって何とか実施された. しかし全日本選手権には関西からの

1933 (昭和8年)

出場はほとんどなかった。

- ・デ杯戦に三木、佐藤(次)、布井、伊藤選ばれ、5月5日よりハンガリー、アイルランド、ドイツをそれぞれの国の会場で快調に楽勝し、6月17日より対オーストラリアと戦い(バリー)、3:2で惜敗した。
- ・6月26日からのウィンブルドン大会に佐藤(次)は7位にシードされて出場。世界の強豪4人を破った後、準々決勝でイギリスの第一人者オースチンを破って観衆を驚かし、準決勝でクロフォード(豪)に敗れた。またこの時、複で布井と組み決勝まで進んだが、ポロトラ、ブルニョン組(仏)に敗れた。この健闘で日本のダブルスも世界一流に伍し、日本庭球の強さを世界中に鳴り響かせた。
- ・佐藤(次)はこの年、庭球界の権威として有名な、ワーレス・マイヤーズのランキングに第3位として発表された。1. クロフォード(豪) 2. ペリー(英) 3. 佐藤(日) 4. オースチン(英) 5. バインズ(米) 6. コシュ(仏) 7. ルールズ(米) 8. ウッド(米) 9. クラム(独) 10. ストーフエン(米)。
- ・11月、イギリス一流の女流選手、ドロシー・ラウンド嬢とメリー・ヒーリー嬢の二人がアメリカからの帰途日本に立寄り、関東、関西で歓迎試合を行なった。
- ・軟式では前年の混乱が何とか收拾され、1月25日に新統一団体「日本軟式庭球連盟」が成立した。そして軟庭界の大問題であった競技規則は、規則委員会の審議検討により特に問題になっていた交互サービス制は昭和8年限り廃止となって解決した。

1934 (昭和9年)

- ・1月12日、楠本、平井選手がヒリピン協会の招待で出発した。
- ・デ杯選手として、三木、佐藤(次)、布井、西村、藤倉(二)、山岸が推されたが、布井は辞退し、佐藤次郎は遠征途上船からマラッカ海峡に投身自

- 殺した(4月5日)。その死は日本のみならず、世界テニス界にとっても大きな損失であった。
- ・デ杯戦、一回は不戦勝だったが、第2回戦でオーストラリアに敗退した。
 - ・軟式では、前年混乱状態の解決をみたので、新たな行事として伊勢神宮大会を開催することにした。これには日本の各地から各種の試合に1,664人の参加を得て、8月4日から8日間、宇治山田市の神宮皇学館運動場8面のコートで盛大に行なわれた。
- 1935 (昭和 10 年)
- ・2月12日より、マニラのオールカマーズ・トーナメントに日本から吉岡、林の2人が参加、複は決勝でオーストラリアに敗れた。
 - ・デ杯には山岸、西村出場、5月3日からの対オランダ戦には5:0で勝ったが、第二回戦対チェコ戦(6月6日より、プラークにて)には1:4で敗れた。
 - ・11月7日—18日までの全日本男子大会には、来日中のチェコのメンツェルとヘヒトが参加した。全日本大会に外人が参加したのはこれが始めてであった。
 - ・1月27日、評議会において従来の「日本軟式庭球連盟」なる名称から軟式を除いた「日本庭球連盟」と改称した。硬式の方は「日本庭球協会」である。
 - ・8月3,4日に内地対全京城の試合が行なわれ、内地軍は惨敗した。
 - ・第8回明治神宮大会は全日本選手権も兼ねて(恒例)行なわれ、OBは第1種40歳以上、第2種45歳以上と区別したが、第2種の選手は、第1種にも参加できるというものであった。
- 1936 (昭和 11 年)
- ・デ杯戦には不参加(会長欠員にて募金困難、選手不足などの理由)。
 - ・10月、アメリカのプロ選手チルデン、バインズ、シャープ嬢の3人が読売新聞社の招待で来日、チルデンの庭球王としての円熟した技倆、バインズの正統的テニス、世界一の實力、殺人的サーブ、

- スピードなど田園コート、甲子園に連日満員のなかで素晴らしい演技を見せてくれた。
- 軟式界もチルデンなどの来日に際して日本の軟庭を紹介するため、10月27日田園調布読売コートで5組ずつの東西対抗を挙行政した。
- 1937 (昭和 12 年)
- 2月、男女4選手がフィリピンに遠征(竜田、長谷川、松平直子、山岸久子)、女子は複で優勝。
 - デ杯は北米ゾーンに、山岸、西村、中野選手出場したが、第1回戦でアメリカに5:0で敗れた。
 - 10月~11月、ドイツのデ杯選手、クラム、ヘンケル、ホルン嬢来日。スポーツ外交の意味が深かった。
 - 片山杯倶楽部対抗戦が創始された。片山直方氏の熱と努力により、甲子園に100面のアンツーカーコートに1万人収容のセンターコートが10月24日完成した。
 - 軟式では全日本選手権を神宮大会と切り離して、8月22日戸山学校で開いた。
- 1938 (昭和 13 年)
- 2月6日、松本、鶴田選手はマニラ遠征に出発、複で優勝した。
 - デ杯戦には山岸、中野、倉光が安部監督と参加、7月28日からの対カナダ戦は5:0で快勝した。8月12日から、第2回戦はカナダに2:3で敗れた(モントリオールのマウントローヤル・クラブ)。
 - 7月9日、原料のゴム使用禁止令が出て、ボールの製造に支障を来たしたが、秋に硬軟共に0.75トンの生ゴム使用、2,625ダースの製造が許可され、配給制となった。
 - 軟式では統制団体であるべき連盟が、厚生、文部、商工各省から統制団体として認められていなかったもので、ボール問題にも発言権なく、至急組織の改善、機構の強化をはからざるを得ない事態に直面した。
- 1939 (昭和 14 年)
- デ杯戦への派遣中止(日華事変のため物資欠乏、選手入隊など)。
 - 10月~11月、ユーゴスラビアのブンチェッツと

1940 (昭和 15 年)

クェビッチ来日し、第 18 回全日本男子大会にも参加し、単ではブ選手が、また複でもユーゴ組が優勝した。

・軟式では前年の事情もあり、5 月 26 日大日本体育協会に加盟し、「日本軟式庭球連盟」と改称した。

・12 月 23 日、機関誌「庭球」を刊行。

・デ杯戦中止 (第 2 次欧州大戦のため)。ボール供給も僅少となり、テニス人の戦死者も出た。

・紀元 2600 年奉祝東亜競技大会が東京 (6 月 5~9 日) と大阪 (13—16 日) で開かれ、テニスは日満比戦で比のアンボン選手の活躍が目立った。

・3 月、比島国際大会に小寺、木村、加茂純子、幸子の 4 選手が参加。

・10 月、ドイツのヘンケル、ギースとブルク監督を迎え、日独交歓試合を行なった (田園 10 月 17—21 日、甲子園 10 月 25—27 日)。

・12 月 7 日、日本庭球協会創立 20 周年記念会が丸ノ内会館で催された。

・軟式でも東亜競技大会の東京大会 (日比谷公園コート、6 月 8, 9 日)、関西大会 (橿原神宮コート、6 月 15 日) を開催。

・伊勢神宮大会 (8 月 4—7 日、皇学館コート)。

・第 11 回明治神宮国民体育大会には北支、蒙疆も参加した。

1941 (昭和 16 年)

・6 月 14 日に神戸を出帆した遣独日本チーム選手 (限丸、藤倉 (五)、三木監督) は独ソ開戦のため、ドイツ行きを中止し、日満交歓試合を行なって帰京した。

・第 12 回明治神宮大会 (10 月 31 日より、田園コート) から審判用語は純日本式となった (15 対零、40 対 30、甲勝越の如く)。

・軟式では、1 月 17 日、連盟規約を改正。

・全国的な大会も制限された。

・スポーツ界も戦時型となり、敵性用語全廃で、軟式でも「スリー・ワン」は「3 対 1」と称えるようになった。

- 1942 (昭和 17 年)
- ・ボールの配給が少くなり (年 3 回 7000 打) 充分な活動ができなくなった.
 - ・9 月に臨時総会を開き「日本庭球協会」の解散を決議するに至った.
 - ・軟式においても、戦時体制に統制され、大日本体育会の傘下団体の「軟式庭球部会」となった.
 - ・試合も、満州建国十周年慶祝東亜大会、第 5 回伊勢神宮奉納大会、明治神宮国民錬成大会という形で行なわれた.
- 1943 (昭和 18 年)
- ・ボールの支給は前年の約半数 (3,618 ダース) となり、選手、学生の多くが入隊し、戦死した名選手もあった.
 - ・10 月 9 日、東京庭球大会はかろうじて開催された (田園コート).
 - ・軟式の機関誌「庭球」も 1 月を終刊号として、「体育日本」に統合された.
 - ・テニスコートは次ぎ次ぎと戦時農園として耕されて行った.
- 1944~45(昭和19—20)
- ・全くの空白時代、戦時耐乏の生活であった.
- 1945 (昭和 20 年)
- ・デビス氏死亡 (66 歳).
 - ・11 月 10 日、日本庭球協会復活 (会長、勝田永吉).
- 1946 (昭和 21 年)
- ・第 15 回全日本学生大会 (7 月 20 日から、中百舌コート).
 - ・10 月 12 日、第 22 回全日本男子大会 (田園コート).
- 1947 (昭和 22 年)
- ・4 月 12 日から、関東学生大会 (田園、早、立大コート).
 - ・5 月 12 日から第 22 回関東男子大会 (田園).
 - ・7 月 21 日から第 16 回全日本学生大会 (田園).
 - ・9 月 13 日から第 26 回毎日トーナメント (田園、東伏見、目白東、早、明大各コート).
 - ・10 月 10 日から第 23 回全日本男子大会 (甲子園コート).
- 以上の如く各大会が戦前と同様に開かれるようになった.
- ・軟式も、この年の石川県での国民体育大会を中心に

- に多くの大会が始められた。
- 8月, マックァーサー元帥記念杯大会(都市対抗で, 高校男女, 一般男女, 壮年組に分れて, 甲子園コートにて).
- 1948 (昭和 23 年)
- 軟式の天皇杯選手権大会(名古屋市久屋町新設コート).
- 1951 (昭和 26 年)
- 戦後デ杯戦に始めて出場, 熊谷監督の下に限丸, 中野, 藤倉(五)の3選手, アメリカと7月20日より3日間, ケンタッキー州のルイビルにて, 5:0にて敗れた.
 - 10月, 朝日新聞の招きで, 前年アメリカの覇者, 左利きのラーセンと18歳のリチャードソンが来日.
- 1952 (昭和 27 年)
- 1月25日よりカルカッタの全インド大会に, 中野, 加茂(礼), 宮城(淳)の3選手が出場し, その後各地で善戦した.
 - 7月25日より, デ杯戦北米ゾーンに限丸, 宮城, 中野出場. アメリカに5:0で敗れた(シンシナティのコートにて).
- 1953 (昭和 28 年)
- 1月, 限丸, 木村, 加茂幸子の3選手, パキスタンに遠征.
 - 3月, 安部監督と高石, 桜井の両少年はヒリビンのジュニア大会に招待されて参加.
 - デ杯戦, 北米ゾーンに出場した宮城, 加茂(公), 木村(監督山岸)は第1回戦に3度アメリカと当たり5:0で敗れた.
 - 7月24日, ヒリビンのジュニア選手ホセ, エリサルデ, デュンゴ, タローの4人がカルモナ監督と来日. 中百舌コートでの全国高校大会に出場し, 単複とも比島選手が優勝した.
- 1954 (昭和 29 年)
- 2月, マニラの南アジア庭球大会に加茂幸子は一人で参加, 単, 複, 混合複に快勝した.
 - 7月9日よりのデ杯戦に清水善造監督, 宮城, 加茂(公)の2選手が出場, 対メキシコ戦で2:3で敗れた(メキシコ市, チャブルテベク・スポーツセンター).
 - 5月, ウィンブルドン大会に加茂幸子出場, 3回

1955 (昭和 30 年)

戦で惜敗した。

- 9月, 世界的4選手, クレーマー, ゴンザレス, セグラ, セッジマンが読売新聞社の招待で来日し, 東京, 大阪などで絶妙な快技を見せた。
- 5月 28 日より, 日本で最初のデ杯戦が田園クレールコートで行なわれた。加茂, 宮城出場し, フィリピンを 3:2 で破った。
- 7月 5 日より, デ杯第二回戦はニューヨーク州ロングアイランド, グレン・コープのナッソー・クラブで行なわれたが, 4:0 でオーストラリアに敗れた。

(昭和 46 年 2 月 17 日 受理)